

須玉町埋蔵文化財調査報告

第 1 集

大 小 久 保 遺 跡

— 9世紀後半代の土師製作址 —

県土地開発公社峡北地域中核工業団地造成に伴う
山梨県北巨摩郡須玉町大小久保遺跡調査報告書

1983

須玉町教育委員会

序 文

大小久保遺跡は、山梨県が推進している総合福祉計画を支える産業政策の一環として、県内各地に造成されている地域中核工業団地のひとつである『駿北地域中核工業団地』の一例にあります。

今回の調査では、県内は、もとより全国的にみても稀な平安時代の土師器の製作跡が発見され、当時の土器生産地であったことが判りました。千年を経た今日、同じ地に工業団地が建設されること、誠に感慨深いものがあります。又、住居跡より発見された多くの布目瓦は、この地域の何処かに瓦を使用する事ができた有力者の建物が存在したと考えられます。その建物は、寺院だったのか、この地方を中心とした官牧の牧監の館だったのか、地方政府の中心であった郡衙でもあったのでしょうか……。この遺跡は、私たちの住む須玉町の古代史への誇りと、将来発見されるかもしれない先人の遺跡に対する多大な期待と想像を与えてくれました。今回の調査で発見、記録保存された貴重な文化遺産が広くみなさんに活用され、埋蔵文化財に対するご理解がより一層深められるよう願ってやみません。

なお、本報告書は須玉町教育委員会の埋蔵文化財調査報告第1集となるもので、このことは、本町の文化財保護行政にとって記念すべきことと考えられます。

ここに試掘調査時より適切な御助言をいただきました、県文化課、県土地開発公社の各位、また調査に当つての御理解と御協力をいただいた調査員はもとより、地元の作業にあたられた皆様に対し、深甚なる敬意と感謝の意を表する次第であります。

昭和58年3月

須玉町教育委員会

教育長 磯 村 茂

例 言

1. 本報告書は、岐北地域中核工業団地の造成に伴う大小久保遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 遺跡は、山梨県北巨摩郡須玉町若神子字大小久保に所在した。

3. 試掘及び本調査は、山梨県土地開発公社の委託により、須玉町教育委員会が昭和56年度に試掘調査、昭和57年度に本調査、遺物整理、報告書作成を行なった。

4. 本報告の遺物実測は、山秋・深沢・津金・清水、トレースは山秋、執筆は山路・深沢が分担し、編集は山路が行った。

5. 本調査における図面・写真・出土遺物は須玉町教育委員会が保管している。

6. 発掘調査組織

調査主体　須玉町教育委員会

調査担当　山路恭之助

調査員　佐野勝広（試掘）山秋 泰（本調査）

補助調査員　深沢裕二

7. 事務局

須玉町教育委員会

社会教育係

8. 発掘調査参加者

信印虎吉 堀内高徳 坂本茂富 日向清子 仲田咲代 堀込静子 松田かね代

坂本ひさ子 堀内とし子 渡辺助男 津金久司

9. 遺物整理参加者

津金伸二 清水仁量

目 次

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の立地と地理的環境	1
III	序	3
IV	遺構	4
1	住居址	
2	平窓	
3	土壤及び竪穴群	
V	遺物	17
VI	まとめ	57
図	判	60

I 調査に至る経緯

山梨県では、総合福祉計画を支える産業政策の一環として、労働力や用水など地元資源の有効活用を図りながら、県内の均衡ある発展を推し進めるため、県内各地に基幹工業団地、地域中核工業団地、そして地区拠点工業団地などを建設している。

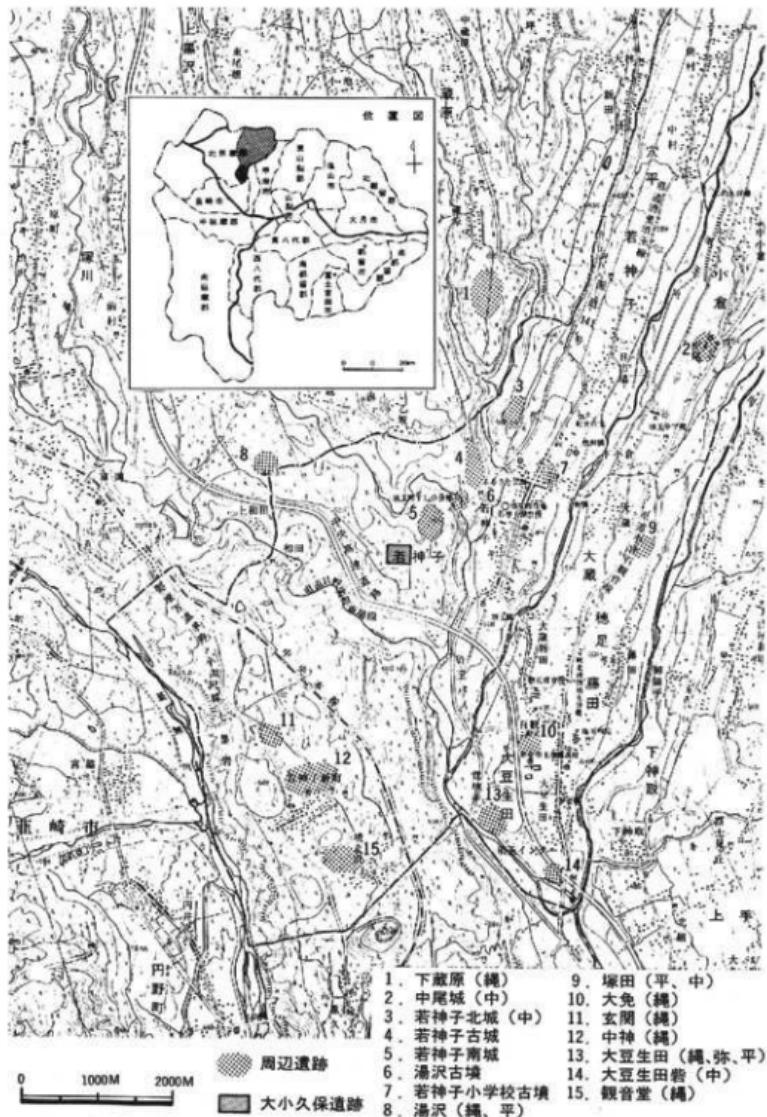
駒北地方では、須玉町及び高根町に跨がる地内に駒北地域中核工業団地を造成することとなった。規模は、工業団地⑧～⑩（169,691m²）、道路敷（33,409m²）で総面積203,100m²が計画され、内、須玉町地内には⑧～⑩の3区画（100,191m²）が決定した。

予定地内の埋蔵文化財については、県教育委員会によって踏査が実施され、須玉町地内では⑨区画、⑩区画の一部で土器片が散布しているのが判り、これに基づき造成を行なう県土地開発公社と県教育委員会、須玉町教育委員会の三者が協議を行ない、試掘調査を実施する事となり、調査主体は須玉町教育委員会があたるものとした。昭和56年9月18日、県土地開発公社と須玉町との間に委託契約が交わされ、調査は昭和56年9月25日～10月20日まで実施した。その結果、⑨区画4496-116番地（本調査時A区とした）から上器片多数と掘立柱建物遺構の一部と思われる柱穴が発見され、⑩区426と4539番地（本調査時B区とした）から掘立柱と思われるものが発見された。10月27日に調査結果の報告書を提出し、これをもとに三者で協議を行なった結果、本調査を実施する事となり、調査主体は須玉町教育委員会があたるものとした。

昭和57年7月13日に県土地開発公社と須玉町との間で本調査に対する委託契約を交わし、調査期間は7月20日から9月20日迄の2ヶ月間とした。調査は、B区A区の順で進められ、A区の調査中、調査範囲の北西より発見された住居址（1号位）内より多量の瓦が出土し、又、その住居址の上層部に建物址の基盤部かと思われる版築状の土層が発見され、更にその範囲が調査区域より北（試掘時の前年に土採取が行なわれていたため試掘対象外であった）へ続くことが判明し、瓦を伴う建物址の存在が予想された。この為、急速、県土地開発公社、県教育委員会、須玉町教育委員会とで協議を行ない、調査範囲を拡大することとして、新しくC区、D区を設定して調査を継続した。11月中旬に発掘調査をほぼ終了し、11月25日調査結果を県土地開発公社と県教育委員会に報告を行った。

II 遺跡の立地と地理的歴史的環境

大小久保遺跡は、国道141号線と中央自動車道が交差する地点の北西で、若神子の集落の真西にあたり、北を甲川、南を鳩川にはさまれた比高約100mの台地上、八ヶ岳南麓の東端に立地する。遺跡に立つと南に富士を眺め、眼下には韮崎市以北の坂川、須玉川水系の平野部を見ることができる。西は茅ヶ岳、その山裾に明野、穂坂がひらけ、金峰山、瑞牆山を眺めることができる。この地方は、近世の行政区画上、辺見筋と呼ばれる地方にあたり、八ヶ岳南麓に形成された広大な台地（八ヶ岳山体の大規模な泥流で形成された）は、この筋の大部分を占める地

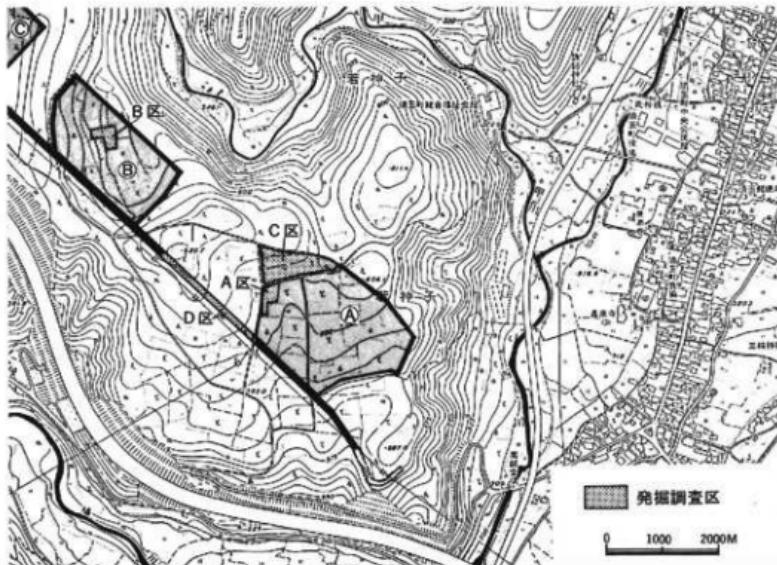


第1図 大小久保遺跡及び周辺遺跡位置図

城であり、此處に住む人々は、この台地を総称して『七里ヶ岩台地』とか『辺見台地』と呼んでいる。平野部との境は、須玉川及び下流の塩川の浸食によって、比高約 100mの急崖を形成している。この崖は、南の若崎市から北は山間部の須玉川全流域まで10数kmにわたって南北に続き、辺見台地と平野部とを明瞭に区分し交通の障害となっている。辺見台地の主要集落をその水系に持つ河川は、鳩川、中川と西川があり、これらの河川のすべてが若神子周辺に溢ぎ、各河川共、辺見台地内部へ深く長い狭間をつくっている。河筋の集落を結ぶ交通路が非常に発達していたものと考えられる。このような地理的背景を持つこの地方には、縄文時代から中世城郭まで市広く遺跡が散在している。（第1図）調査された遺跡は、昭和49年の大豆生田遺跡（第1図の13）と昭和56、57年の若神子古城遺跡（第1図の4）がある。大豆生田遺跡は、平安時代を中心とするもので当遺跡と最も関係しており、布目瓦片を出土している。若神子城でも本遺跡出土の布目瓦片と同一のものが出土している。又、湯沢遺跡（第1図の8 58年3月現在調査中）からも古瓦片が出土しており、この附近に布目瓦を使用した建物が存在する可能性が濃厚となった。甲斐国志に依れば、若神子の対岸の大歳、小倉（第1図参照）を屯倉の推定地として記述している。屯倉とは、大和朝廷が各地に設けた直轄領のこと、その成立には、従来の間接的支配が直接支配に切り替えられたもの、反乱者から没収したもの、帰化人を定住させて開墾したものが挙げられ、甲斐國、特に北巨摩地方は其の名が示すように帰化人と密接な関わりを持ち、後に成立、発展する牧の經營にも帰化人達が持つ特殊技術（授産管理など）が多く貢献していると考えられる。平安時代の柏原、真衣野、穗坂の三官牧は、いずれも北巨摩地方に推定地をもち、須玉町の地は、三官牧を掌握できる地理にあたる。（類聚三代格）には、大長4年（827年）甲斐國に牧監を置き御牧を監督させるとの記事が見え、その以前から官牧が成立していた事が判る。そして、10世紀にはいと、毎年一定数の馬を宮廷に納める駒幸の行事が盛んに行なわれた。駒幸の行事が衰退した12世紀には、この官牧地帯を根拠として甲斐源氏が勃興し、その祖である新羅三郎義光の居館が若神子の地に在ったとされているのも、この地方の政經、軍事に亘る重要な地域であったことがうかがわれる。

Ⅲ 層序

工業開拓造成に伴う地質調査の結果、この附近の台地は第四紀洪積世に於て八ヶ岳山体に起った大規模な泥流の結果堆積した堆積泥流が分布し、それに不整合に同洪積世の八ヶ岳南麓砂礫層、日野春砂泥層、ローム層が堆積し、表層は冲積層が薄く分布していることが判明している。遺跡附近では、表土は黒褐色或いは黒ボクといわれる黒色を呈し、二層は暗黄褐色や黄褐色、三層はローム層に大別され、遺構は二層、三層をきりこんで作られている。工事中の切り通しを観察すると、台地先端部のローム層下部に白色粘土層が見られ、その土を主体とした粘土が後述する1号住居、3号住居から多量に遺存され、出土した多くの土器の胎土も、この土を基調としていると考えられる。又、台地の先端部近くに僅かながら湧水が見られる。



第2図 発掘調査区位置図

IV 遺構

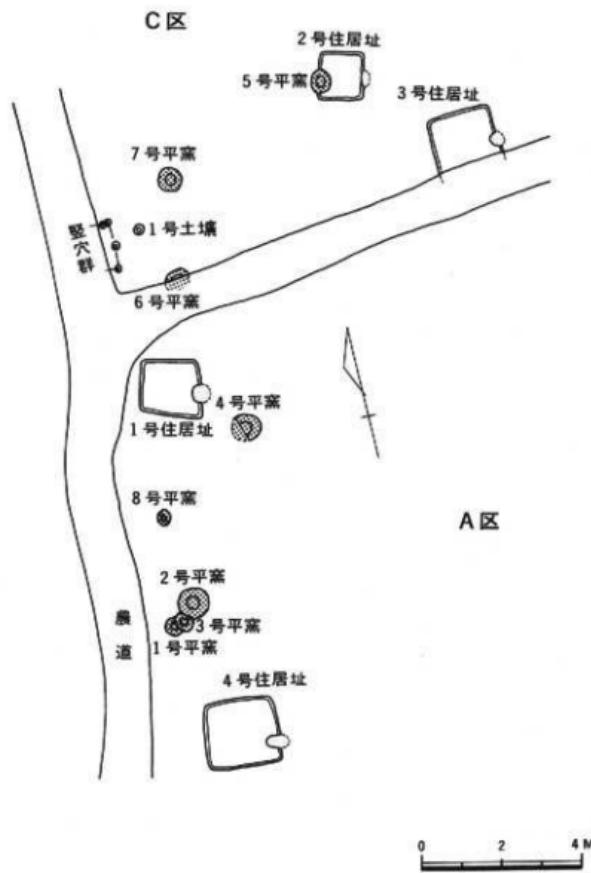
1 概容

調査区はA～D区に跨る範囲を調査した。確実な遺構が発見されたのはA区、C区のみであった。

A区 試掘時より土器片が多く出土した地区で、住居址2軒（1号住居、4号住居）と平窯5基（1～4号平窯、8号平窯）が検出された。1号住居址は土師工房址と考えられる。

B区 試掘時には、柱穴かと思われる小堅穴が2ヶ所発見されたが、本調査時に拡張精査を実施した処、関連ある遺構が発見できず調査を打ちきった。

C区 試掘調査が行なわれる前年に土採取が行なわれており、試掘調査の対象外であったがA区、1号住居址の覆土上層に布目瓦を伴う版築状の土層が発見され、その範囲がC区方向へ続くことが確認されたので急速D区と共に調査区を設定した。調査の結果、版築状の土層は、土採取の際に、大型重機などで踏み固められた為、形成されたものと判断された。しかし、遺



第3図 遺構配置図

構の残存がみられ、竪穴住居址 2 軒（2号住居址、3号住居址）と半窓 3 基（5～7号半窓）、竪穴群遺構が 1ヶ所、土壤 1ヶ所が検出された。

D区一部に焼土層がみられたが、表土中にあった為に最近の焚火の跡かと判断した。他には遺構はなかった。

2 竪穴住居址

1号住居址（第4図）

A区北西隅に於て発見された住居である。隅丸方形のプランで北辺と東辺は 4.2m、西辺は 3.6m、南辺 4.5m を測る。主軸は N-104°-E。壁の状態は、北壁で 65cm 西壁 57cm 南壁 32cm 東壁 27cm を測り、全体にソフトローム層を切り込んでつくられている為、良好な立ち上がりをもつが、東と南壁の一部は暗褐色土層を切り込んでいるためにあまり良好ではなかった。周溝は、竈部を除いて幅 5cm～10cm、深さ 6～8cm の規模でほぼ全周する。床は全体的に良好で、南西部に良質な灰白色粘土が床直上に厚さ 10cm 前後で、南北約 200cm 東西約 150cm の範囲に遺存していた。特に、この粘土層は南壁に接していたと考えられ、周溝添いに約 70cm 幅で直角三角形に近い状態で遺存しており、当時の壁の厚さが 16cm 位であったと推測される。

ピットは 10ヶ所発見された。深さは P-1 (24.9cm), 2 (5.6cm), 3 (10.3cm), 4 (7.6cm), 5 (7.3cm), 6 (19.8cm), 7 (24.5cm), 8 (9.5cm), 9 (24cm), 10 (10.8cm) であった。特にピット 6～8 の内、7 は貼り床がみられ内部には石組があり、その部分も良く踏み固められており人為的に作られたものであった。

竈は東壁のやや南に構築され、規模は長さ 133cm、幅 130cm あり、左袖には袖石がわりに円筒形の土器が使用され上部には土師器の甕片で蓋がしてあり円筒土器の内部は中空であった。右袖は自然石を用いる。暗褐色土を袖部の基部に用いた後、その上部や他の部分は灰白色粘土で覆っている。燃焼部には焼土が 11cm 程の厚さでみられ、土層 5、6 など煙道や燃焼部の天井が落ち込んだ形跡がみられる。

覆土中や床上に多くの布目瓦片がみられ、土師器片竈周辺より、特に竈の南側の掘りこみに集中して出土している。鉄製紡錘車も竈南の掘りこみより出土している。

2号住居址（第5図）

C区、3号住居址の北に於て発見され、西壁の一部を 5号半窓に切られている。プランは方形で南北 3.3m、東西 3.1m を測る。主軸は N-110°-E。壁は、ローム層を切り込んで作られ 50cm 前後の高さで良好に立ち上がる。周溝は、竈部を除き幅 7cm～17cm、深さ 10cm～20cm の規

模ではほぼ全周する。床は良好に遺存し粘性のある赤褐色土を貼っている。ピットは南壁中央付近に1ヶ所(P-1)があるのみである。又、竈の南に浅い掘り込みがある。

竈は東壁中央に構築され、規模は長さ90cm、幅110cmある。袖石は左袖が東壁内に位置し、右袖石はやや住居内にはいる。両袖とも床面より高い位置にあり、天井部には瓶2個を組み合わせた状態のものがあった。燃焼部には支脚も遺存し、煙道も確認されている。

遺物は覆土中層から上層にかけて土器片が集中し、土器捨て場的なものを考えている。竈からは天井部の瓶2個をはじめ燃焼部からも瓶2個体が出土している。全体に甕が多く出土している。

3号住居址(第6図)

C区、2号住居址の南に位置し、南は道路によって切られている。プランは方形であったと考えられる。東西は4.75m、南北は残存する部分で3.9mを測る。主軸はN-87°-E。壁は調査前年に大規模な上取りが行なわれていた為かなりの部分が削平されていたが、北壁や東壁の北よりは18cm~25cmの立ち上がりが確認できた。しかし、西壁は状態が悪く2cm前後であった。周溝は竈部を除き幅10cm~15cm、深さ5cm~15cmの規模で全周すると考えられる。床は中央附近でやや低く、西南の床面には灰白色粘土層がみられた。ピットは12ヶ所あった。深さはP-1(15cm), 2(5cm), 3(5cm), 4(11cm), 5(5cm), 6(15cm), 7(7cm), 8(10cm), 9(5cm), 10(10cm), 11(20cm), 12(20cm)であった。ピット11, 12には焼土層がみられた。

竈は状態が悪く焼土の広がりから、長さ110cm、幅100cm程度規模と考えられる。

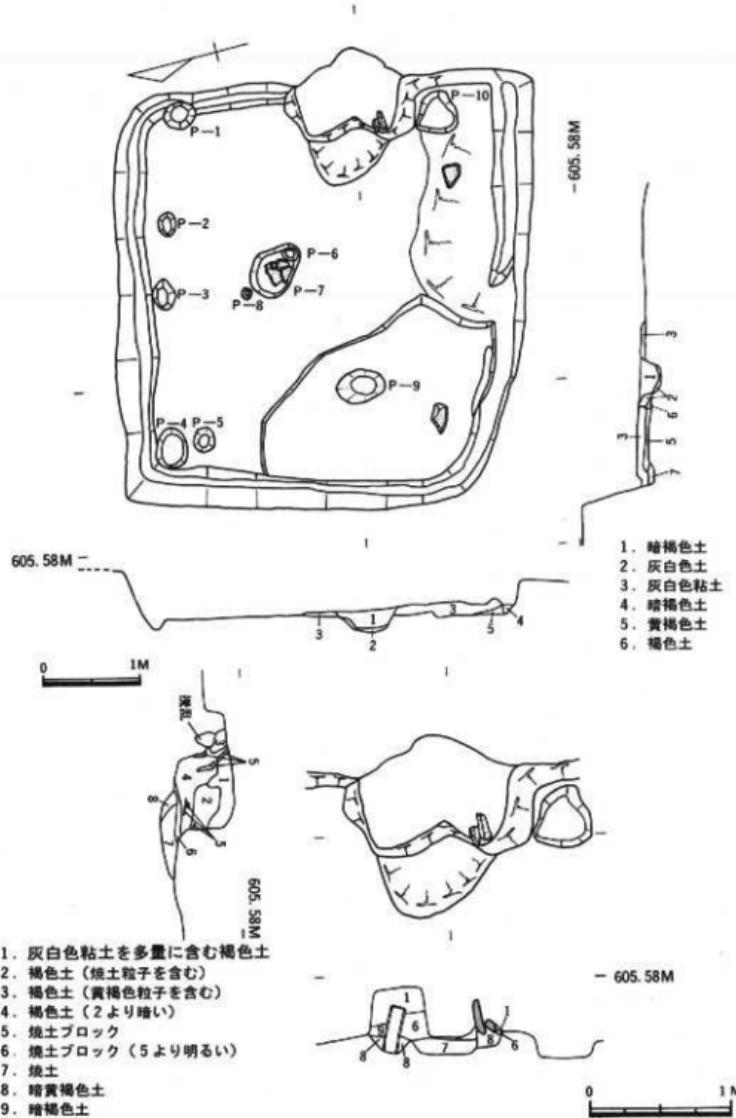
遺物は竈周辺に集中し、ピット10, 11内より須恵器环が出土している。

4号住居址(第7図)

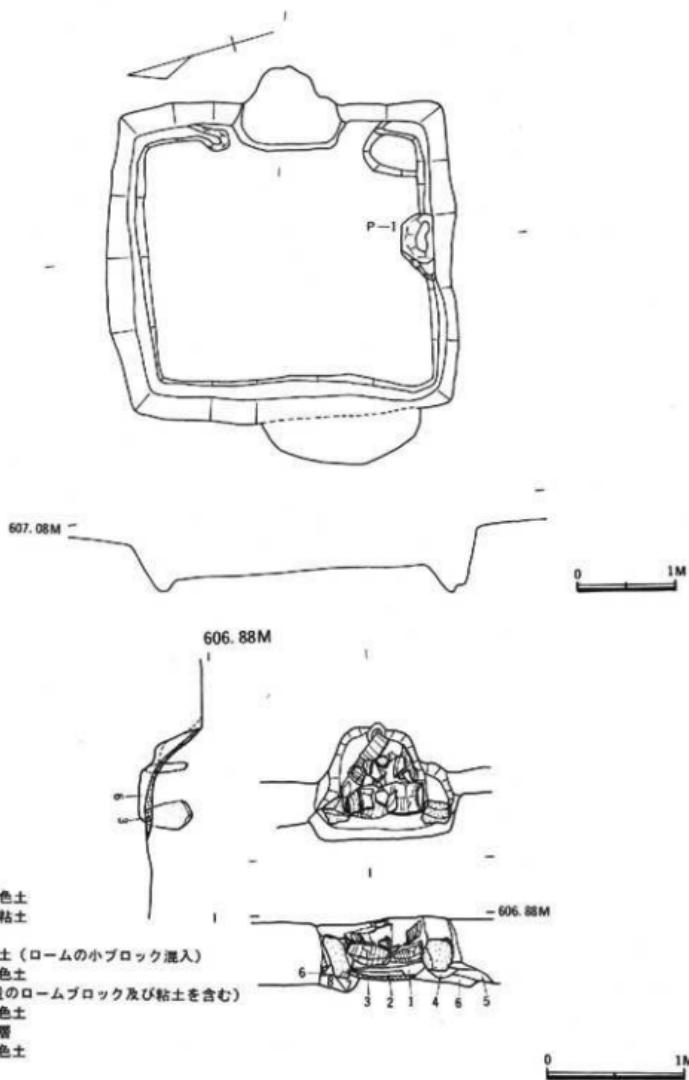
A区の南に位置し、プランは方形で東西4.9m、南北5mを測る。主軸はN-91°-E。壁は50cm前後の高さで良好に立ちあがる。周溝は竈部を除き幅5cm~15cm、深さ10cm前後の規模で全周する。床は明褐色土で全体にしまりがあり良好であった。ピットは3ヶ所あり深さはP-1(5cm), 2(10cm), 3(12cm)であった。

竈は東壁の南に構築されているが攪乱により状態は良くなかった。規模は焼土の広がりより長さ125cm、幅110cm程度と考えられる。

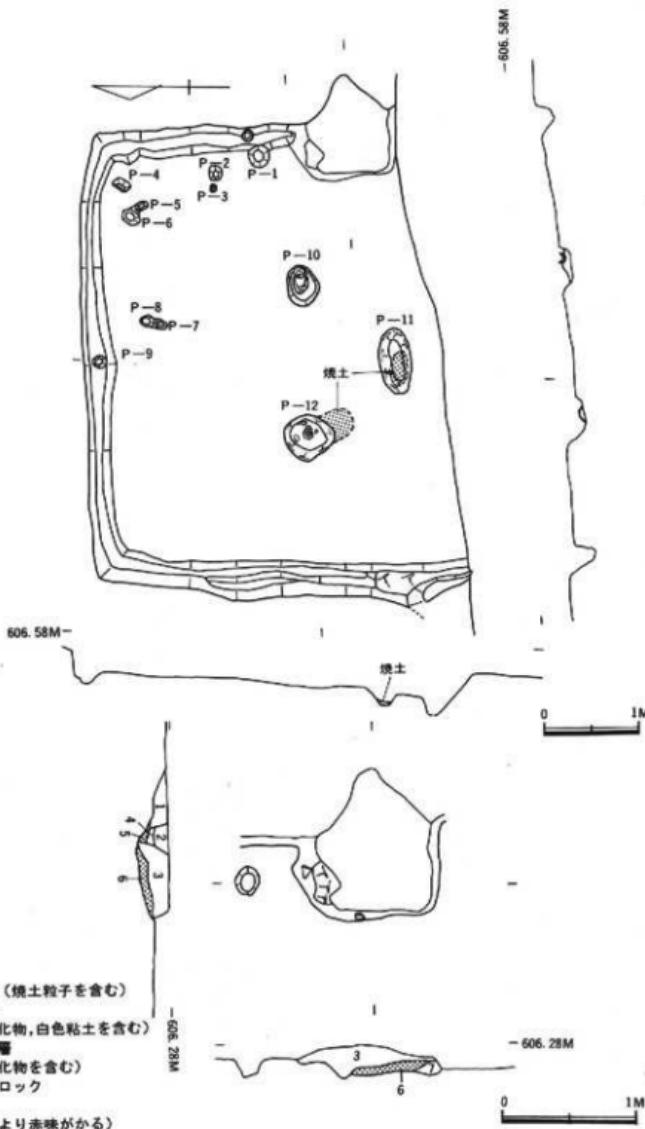
遺物は覆土中のものはほとんどなく、壁近くの床面より多く出土し布目瓦も多く検出された。又、西壁中央附近より鐵錠が出土している。



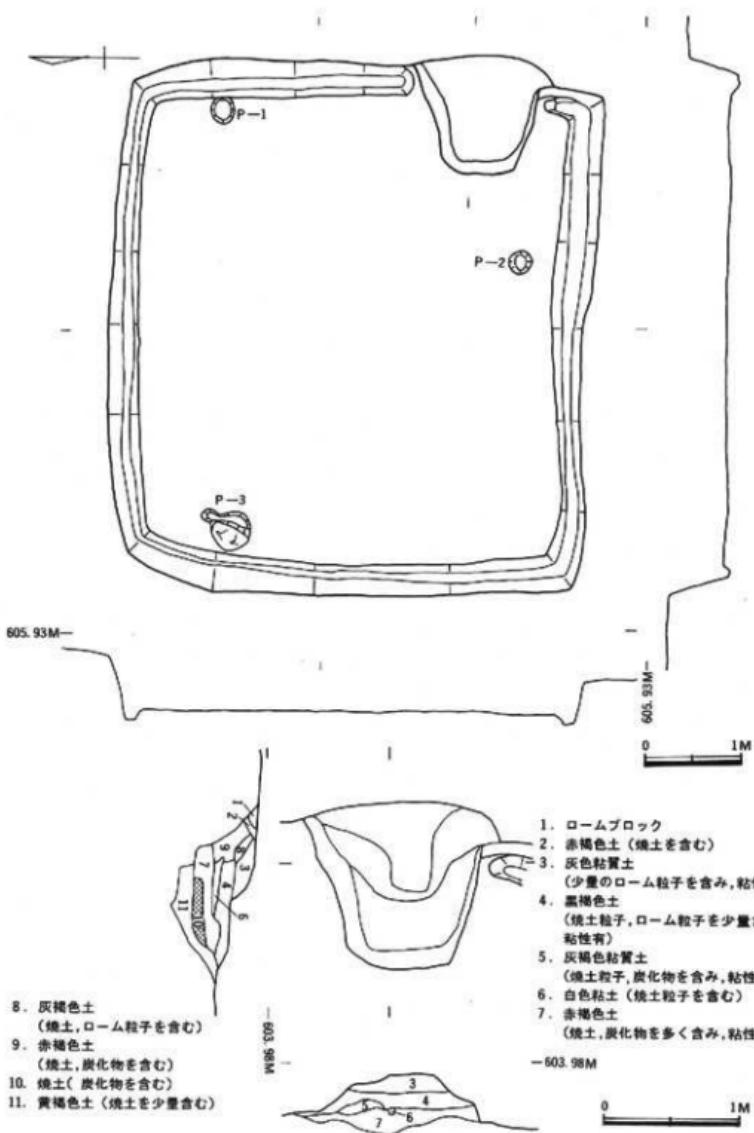
第4図 1号住居址及び竈実測図



第5図 2号住居址及び竈実測図



第6図 3号住居址及び竪穴測図



第7図 4号住居址及び竪穴調査図

3 平 窯（第8～10図）

登り窯に対して、単に地山を掘りくぼめたものを平窯とした。発掘当初は土師窯との確信はなかったが、7号平窯の発掘によって、遺構内より土器焼成中、胎十中の空気が膨張し器体が剝離破損したと考えられる一括土器が発見され、これが平窯であるとの確証を得た。これらの一括土器は、当遺跡内の住居内で発見された内黒土器環A、B（V遺物を参照）の内面黒色處理以前のものであることが判った。7号平窯と同様に遺構の内壁に焼土層をもつたものを、十節器を焼成した平窯として調査した。今回確認された平窯は8基である。

1号平窯（第8図）

A区の南西、4号住居址の北西に位置し3号平窯を切ってつくられている。不整楕円形のプランで $1.2\text{m} \times 1.4\text{m}$ 、深さ50cmを測る。内壁は薄い焼上がりほぼ全体にみられ、窯底には2cm程の焼土が堆積している。遺物は环類5点、甕3点（第23図）が出土している。

2号平窯（第8図）

A区南西、4号住居址の北西に位置し3号平窯を切って作られ、南西の一部を小窓穴に切られている。プランは南北に長い不整楕円形で $2.6\text{m} \times 2.2\text{m}$ 、深さ75cmを測る。内壁は焼土が全体にみられ、窯底には4cm程の焼土が堆積している。中層にも焼土の堆積がみられ2度にわたって使用されたと考えられる。遺物（第23図）は、高台付环3点と甕1点、丸瓦（第32図）1点が出土している。

3号平窯（第8図）

A区南西、4号住居址の北西に位置し、1号・2号平窯と小窓穴に切られている。プランは北西に細長い不整楕円形で $1.9\text{m} \times 0.9\text{m}$ 、深さ48cmを測る。内壁は焼土が全体にみられ、窯底には3cm程の焼土が堆積している。覆上中層にも焼土層の堆積が3cm程みられ、2度使用されたと考えられる。遺物（第24図）は环が3点出土している。

4号平窯（第8図）

A区北東、1号住居址の南東に位置する。プランは攪乱の為はっきりしないが、東西に細長い隅丸方形と考えられる。深さは60cmを測るが焼土層の堆積は中層に10cm程厚くみられ平窯と

は別の遺構を切りこんで作った可能性もある。遺物（第24図）は壺7点、皿と上蓋各1点が出土している。

5号平窯（第9図）

C区北、2号住居の西壁を切って作られている。プランは南北に長い不整梢円形をしていると考えられる。内壁は焼土が全体にみられ、窯底には10cm程厚く焼土が堆積しこの焼土層も2層に別けることができ2度使用された可能性がある。遺物（第25図）は壺類5点、皿2点甕3点など出土している。

6号平窯（第9図）

D区南西、南半分が道路にかかり完掘できなかった。プランは東西に長い不整梢円形と考えられる。規模は $1.6m \times 1.3m$ （推定）で深さ24cmである。内壁は焼土が全体にみられ、窯底には、6cm程の焼土層がみられる。遺物（第25図）は甕が2点出土している。

7号平窯（第9図）

C区北西、6号平窯の北に位置する。試掘溝に南が一部切られている。プランは不整円形で東に小堅穴があるがこの窯に伴うものか不明である。規模は $1.8m$ （推定） $\times 1.7m$ 、深さ45cmである。内壁は全体に焼上がりみられ、窯底には10cm程の炭化物を多く含む焼土層がみられる。遺物（第26図）は窯底に焼成中破損し、そのまま放置された状態で壺類8点が出土している。

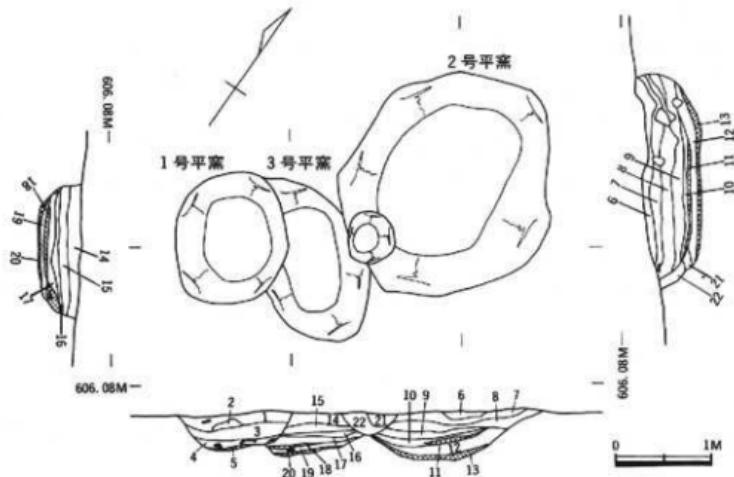
8号平窯（第10図）

A区西、1号住居の南に位置する。上面を擾乱によって削られている。プランは南北に長い不整円形で規模は $1.1m \times 1m$ 、深さ20cm程遺存していた。全体に焼土がみられたが実測できる遺物は出土しなかった。

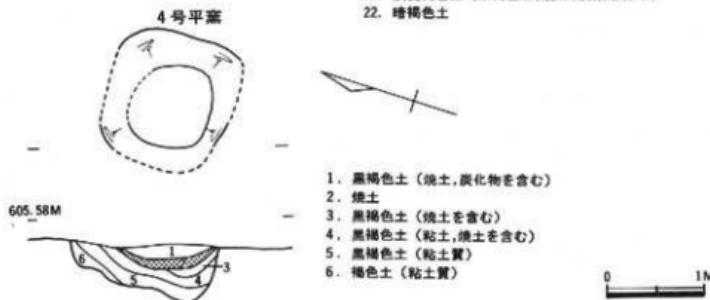
土壙及び堅穴群（第10図）

1号土壙

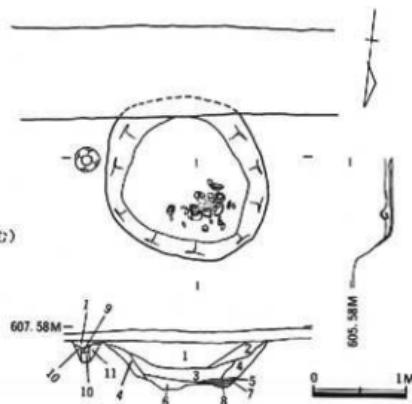
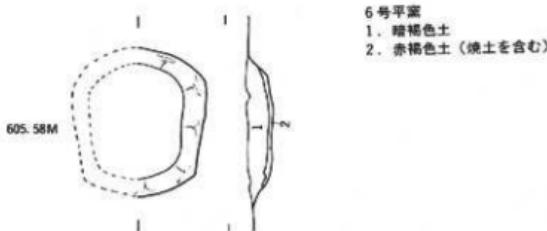
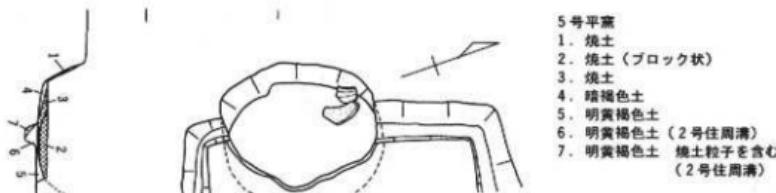
C区南西に位置する。1号土壙は堅穴群の東で発見され、プランは不整円形、規模は $1m \times 0.95m$ 、深さ35cmを測る。土層は4層にわかれる。時期不明。



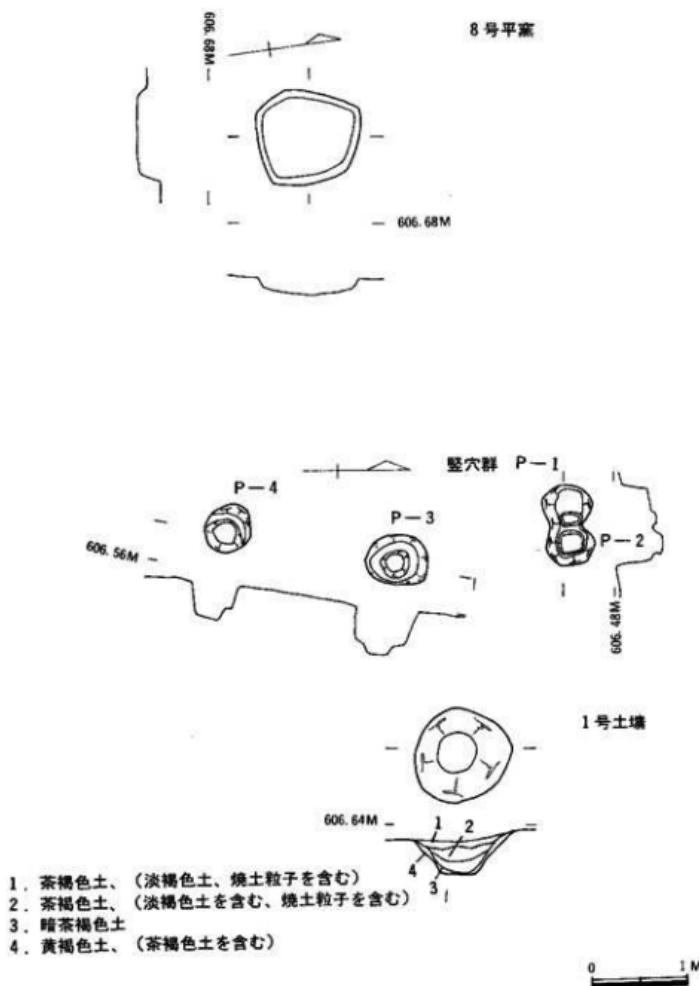
- 1. 黒色土（焼土、炭化物を含む）
- 2. 黄褐色土
- 3. 黑褐色土（焼土、炭化物を含む）
- 4. 黑褐色土
- 5. 烧土
- 6. 黑褐色土（焼土炭化物を含む）
- 7. 赤褐色土（焼土を多く含む）
- 8. 黑褐色土（炭化物を多く含む）
- 9. 黄褐色土（黒色土を含む）
- 10. 黑褐色土（褐色土を含む）
- 11. 烧土
- 12. 黑色土（焼土、炭化物を含む）
- 13. 烧土
- 14. 黑色土
- 15. 黑褐色土（黄褐色土、焼土、炭化物を含む）
- 16. 黄褐色土（炭化物を多く含む）
- 17. 茶褐色土（炭化物を多く含む）
- 18. 淡赤褐色土（焼土、炭素を含む）
- 19. 黄褐色土（炭化物の固りを含む）
- 20. 烧土
- 21. 淡黄褐色土（茶褐色土、焼土、炭素を含む）
- 22. 暗褐色土



第8図 1、2、3、4号平窓実測図



第9図 5、6、7号平窪 実測図



第10図 8号平窪、壑穴群及び1号土壤実測図

堅穴群

C区南西に位置し、掘立柱建物遺構になると考えられるが遺構が調査区外へのびる為、規模形状は不明である。発見された堅穴は4ヶ所で、P-2より壺（第26図）1個が出土している。

V 遺 物

本遺跡出土の遺物、特に土師器を中心に次の様に分類した。供膳形態の壺と皿は内面黒色処理（内黒土器）のものと未処理（土師器）のものに分けた。須恵器壺は3号住居で一括出土したものを持ち須恵器壺Aとした。煮沸・貯藏用態は壺を大別した。

内黒土器

壺A：ロクロ成形され、底部に糸切り痕があり、内面を丁寧に磨いてあるもの。

B：ロクロ成形され、底部は糸切りの後、回転ヘラ削りによって高台を作りだし、中央部は未整形のまま糸切り痕を残す。内面は全面にわたって丁寧に磨かれ、特に体部下半は縱方向にヘラ状施文具によって磨かれている。Aより大型である。胎土はよく精製されている。磨き胎土ともに壺Aと同じである。

皿A：ロクロ成形され、底部は糸切りの後、回転あるいは手持ちのヘラ削りがなされ、中央部には未整形のまま糸切り痕を残すものもある。底部より続く体部下半にも回転あるいは手持ちのヘラ削りがなされている。体部に段をもち口縁部はこの段から立ち上がる。内面は丁寧に磨いてある。胎土はよく精製されている。

B：ロクロ成形された体部に3cm前後の「ハ」の字をした高台が付けられ、口縁部はほぼ水平になり段をもつ。胎土はよく精製されている。

土師器

壺A：内黒土器壺Aの内黒でないもので、内面の磨きが丁寧な物とそうでない物がある。

口径も少し大きいものがある。

B：内黒土器壺Bの内黒でないもの。

C：Aに暗文をもつもので体部がやや張り出すものもある。

D：体部下半にヘラ削りがあり、暗文をもつもの。

E：体部下半ヘラ削りのあるもので甲斐型の胎土、成形をもつ。

皿A：内黒土器皿Aに内黒がないもの。

B：Aに暗文をもつもの。

須恵器壺A：ロクロ成形され底部に糸切り痕を残す。口縁は外傾あるいはやや外反する。

胎土、焼成ともによくない。

煮沸・貯藏形態

- A：長胴形で口縁部が「く」の字に外反し最大径が口縁部にある。ロクロ横ナデ整形がされており、副次的にハケ目痕が胴部に部分的にみられる。焼成は比較的良く、胎土はB、Cより精製されている。完形品はなかった。
- B：長胴形で口縁部が「く」の字に外反する。胴部内外面、口縁部内面にハケ目整形がなされ、底には木葉痕を残すものもある。焼成は比較的良く、胎土は赤褐色系である。完形品はなかった。
- C：口径が20cm以下の小型なもので、輪積みの後ロクロ整形を行ない底部には糸切り痕を残す。口縁は外反し最大径は胴部にある。

以上のほかの土師器・須恵器・鉄器は出土数が少なく細分は行なわなかった。

内黒土器壺A……3号住居を除きすべての住居より出土している。1号住居から4個（第11図3、9～11）2号住居から5個（第14図3、10～13）4号住居から3個（第21図4～6）出土している。平窯からの出土はない。この土器は本遺跡の平窯で焼成され高温時に窯外で炭素吸着法による内面黒色処理されたものと考えている。7号平窯の窯底より焼成中破損した括土器のうち土師器Aはこの類の内面黒色処理前のものと考えている。

内黒土器壺B……1号住居から3個（第11図12～14）4号住居から6個（第21図9～14）出土している。平窯からは平窯1より1個（第23図4）平窯3より1個（第24図3）の覆土中より出土している。この種類も内黒土器壺A同様に本遺跡の平窯で焼成され高温時に窯外で炭素吸着法による内面黒色処理されたものと考えている。7号平窯の窯底より焼成中破損した括土器のうち土師器杯A同様に土師器杯Bがこの種類の内面黒色処理前のものと考えている。

内黒土器皿A……1号住居から3個（第12図5～7）出土している。胎土・焼成が内黒土器壺A、Bと同じで同様に本遺跡で焼成されたものと考えている。

内黒土器皿B……1号住居から3点（第12図6、8）4号住居から1個（第22図1）出土している。この種類も胎土・焼成が内黒土器壺A、Bと同様のものであり本遺跡で焼成されたものと考えている。

土師器壺A……1号住居から5個（第11図1、4、5、7、8）3号住居から3個（第19図1～3）4号住居から1個（第21図1）出土している。平窯1から4個（第23図1～4）平窯3から2個（第24図1、2）平窯4から3個（第24図8～10）平窯7から5個（第26図1～5）出土している。特に平窯7のものは焼成中に破損したもので次の工程で内面黒色処理を施されるものと思われ内黒土器壺Aと全く同じ整形をされている。

土師器壺B……住居跡からの出土ではなく平窯より出土した。平窯2からの3個（第23図9～11）は一部内黒の部分がみられる。平窯7からは3個（第26図6～8）が窯底から出土してお

り焼成中破損し放置されていたものと考えられ、内面黒色処理をすれば内黒土器壺Bとなる。

上師器壺C……1号住居から2個（等11図2,6）2号住居から1個（等14図1）平窯4から2個（第24図5,6）出土している。2号住と平窯4のものは体部がやや丸く張り出しており、胎土も赤褐色系であることなど共通点がみられる。

土師器壺D……2号住居より5個（第14図2,4～6,8）4号住より2個（第21図2,3）平窯5より4個（第25図1～4）堅穴群より1個（第26図1）より出土している。2号住居と平窯5と切りあっており平窯の遺物が住居のものに混ざった可能性もある。

土師器壺E……4号住居より1個（第21図8）出土している。甲斐型の搬入品である。

土師器皿A……2号住居より2個（第14～15,17）平窯4より1個（第24図11）平窯5より2個（第25図5,7）出土している。5号平窯の遺物が2号住居のものと混ざった可能性もある。

土師器皿B……2号住居より3個（第14図14,16,18）平窯5から2個（第25図5,7）出土している。5号平窯の遺物が2号住居のものと混ざった可能性もある。

須恵器壺A……3号住居のピットなどから一括出土したもので12個（第19図4～15）ある。

①
工房址と推定される住居からの出土で住居内に遺存していた粘土を胎土としているようであり、本遺跡の近くで焼成された可能性が強い。

甕A……1号住居より1個（第12図11）2号住居より7個（第15図2,3,第16図1～4第17図4）4号住より1個（第22図5）平窯1より1個（第23図7）平窯5から1個（第25図12）出土している。

甕B……1号住から1個（第13図4）4号住から2個（第22図3,4）出土している。搬入品である。年代についてはシンボジウム編年でいうⅥ期～Ⅺ期（9世紀第4四半期～10世紀第3四半期）にはいる。遺物は流れ込みの可能性もあるが遺構の上限は知ることができる。

甕C……1号住から3個（第13図1～3）2号住から9個（第17図1～3,5～9,11）9号住から2個（第20図6,7）4号住から1個（第22図6）平窯1から2個（第23図6,7）平窯2から1個（第23図12）平窯5から3個（第25図8～10）平窯6から2個（第25図13,14）出土している。この器形は長野県諏訪市十二1后遺跡で分類された小形甕B,Cにあたり、編年ではⅥ期～Ⅹ期（10世紀～11世紀前半）に出土する。

その他の土師器

瓶……2号住居のカマドより4個（第18図1～4）出土している。1,2は完形であった。この種類の出土は当地方はまれで今後、分布が注目される。

円筒……1号住居のカマド左袖から出土（第12図15）、国分期のものとしては本県では初見である。

蓋……平窯4から大形のものが出土（第24図12）している。

その他の須恵器

杯……1号住出土の高台付（第12図1）のもの。底部のみだが一応壺とした。

蓋 …… 1号住から2個（第12図10、13）2号住から2個（第17図10、第18図5）出土している
いる。

壺 …… 1号住から1個（第12図14）3号住から1個（第20図9）4号住から1個（第22図
7）出土している。

以上のはか1号住より用途不明で沈線が不規則につけられた土製品（第13図6）と表採品の
墨書き土器片（第26図1）で右形は「川」か「三」と思われるものが出土した。

鉄器

紡錘車（第13図5）1号住の床面より出土した。大形のもので本県では最大のものであろ
う。

鉄鎌（第22図8）4号住南西壁中央附近で出土した。

瓦

平瓦・丸瓦のみで軒瓦の出土はない。すべての住居から数の多少はあるが出土している。特
に1号住・4号住は床面からの出土がみられた。土師窯からも一部出土している。本書に記載
したのは大片を中心としたものである。布日瓦は周辺遺跡で発掘調査された大豆生田遺跡、若
神子城址（古城）、湯沢遺跡のすべてで出土している。若神子城（古城）で出土したものは本
遺跡と同種のもので、他遺跡のものは若干の差異がみられる。くわしい検討は今回は行なえな
かったが今後の事例をまって行ないたい。いずれにしても本遺跡の周辺に瓦の製作地か瓦を使
用した建物址があったことは確実だと思われる。

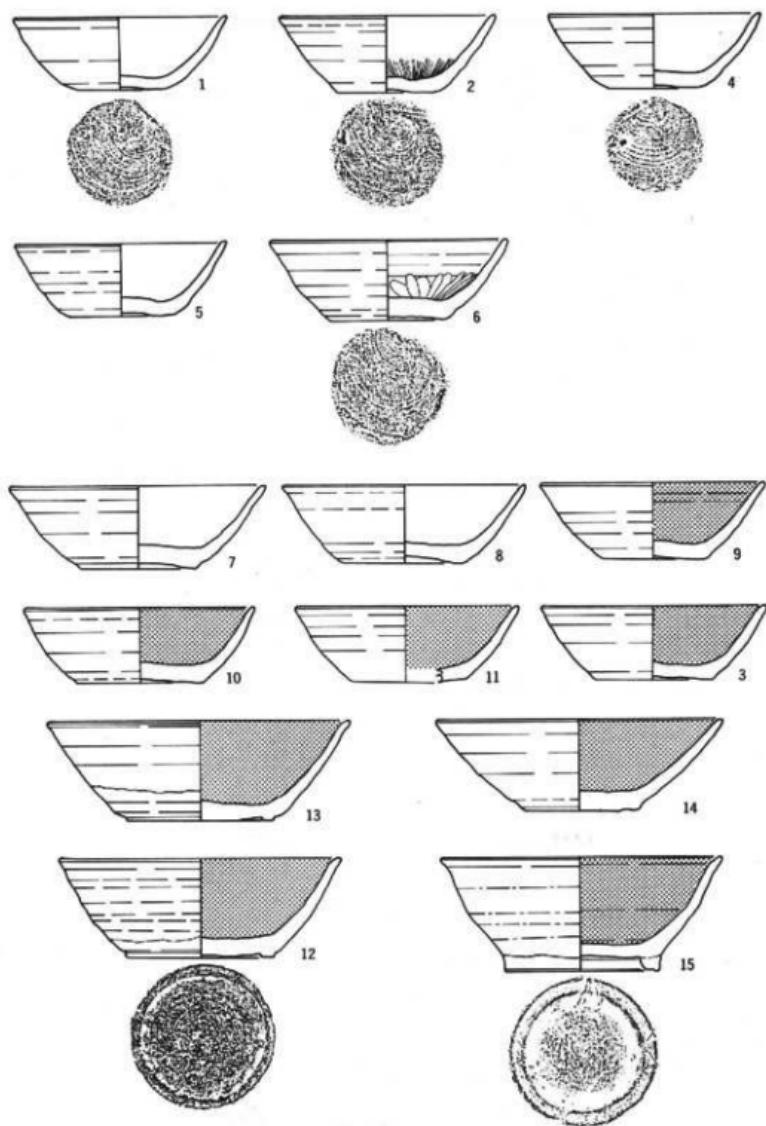
瓦器 1号住居から出土した貼付高台をもつ杯（第11図15）を瓦器とした。

註① 大豆生田遺跡出土のものに胎土・焼成が以てているものがあった。

② 「神奈川考古」第14号「甲斐地域」坂本英夫 末木 健 堀内 真

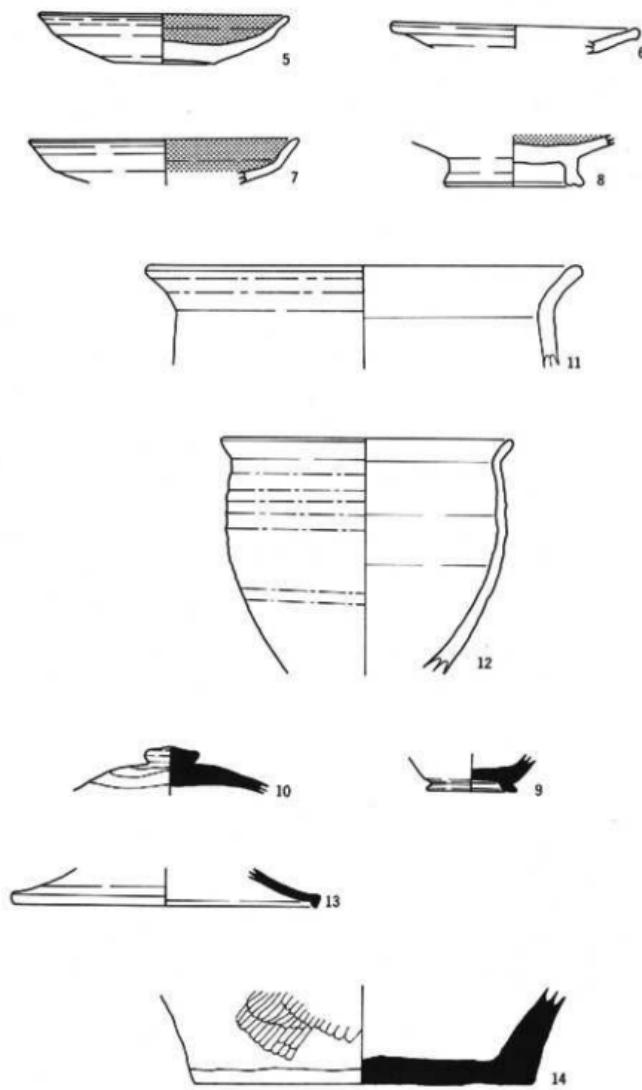
③ 「十二ノ石遺跡の奈良・平安時代の土器編年」桜沢 浩 『長野中央遺跡文化

財包蔵地発掘調査報告書—御殿市その4—』



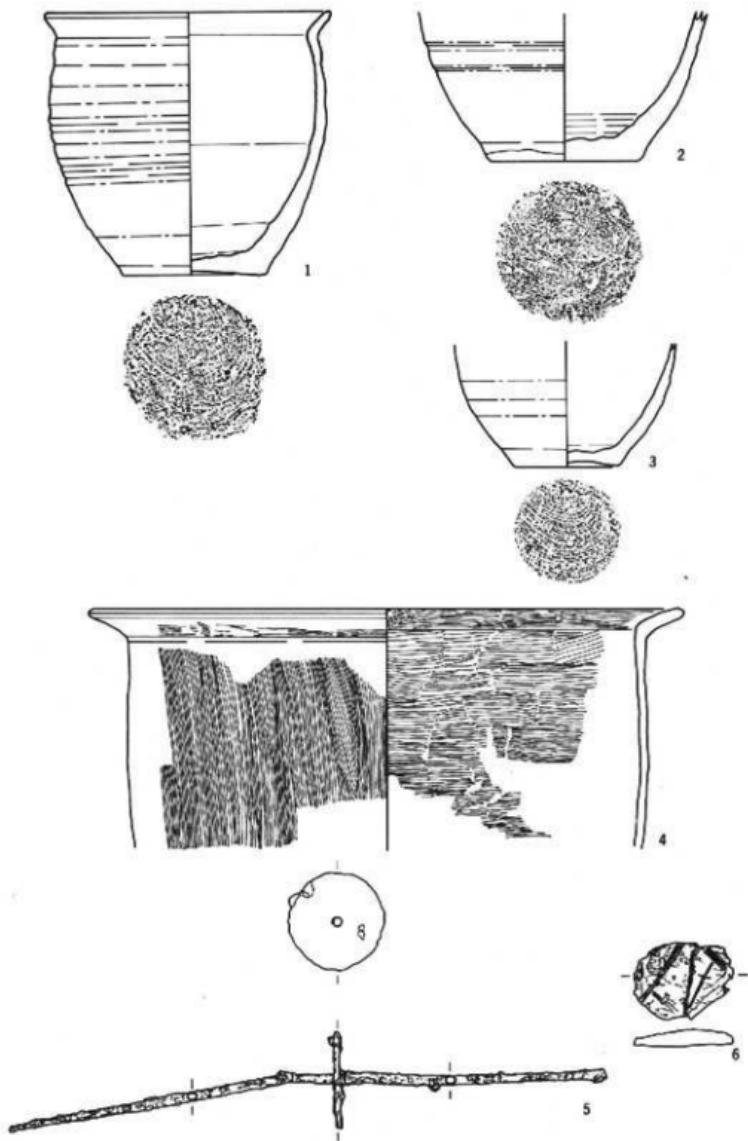
第11図 1号住居址出土遺物実測図

1 : 3



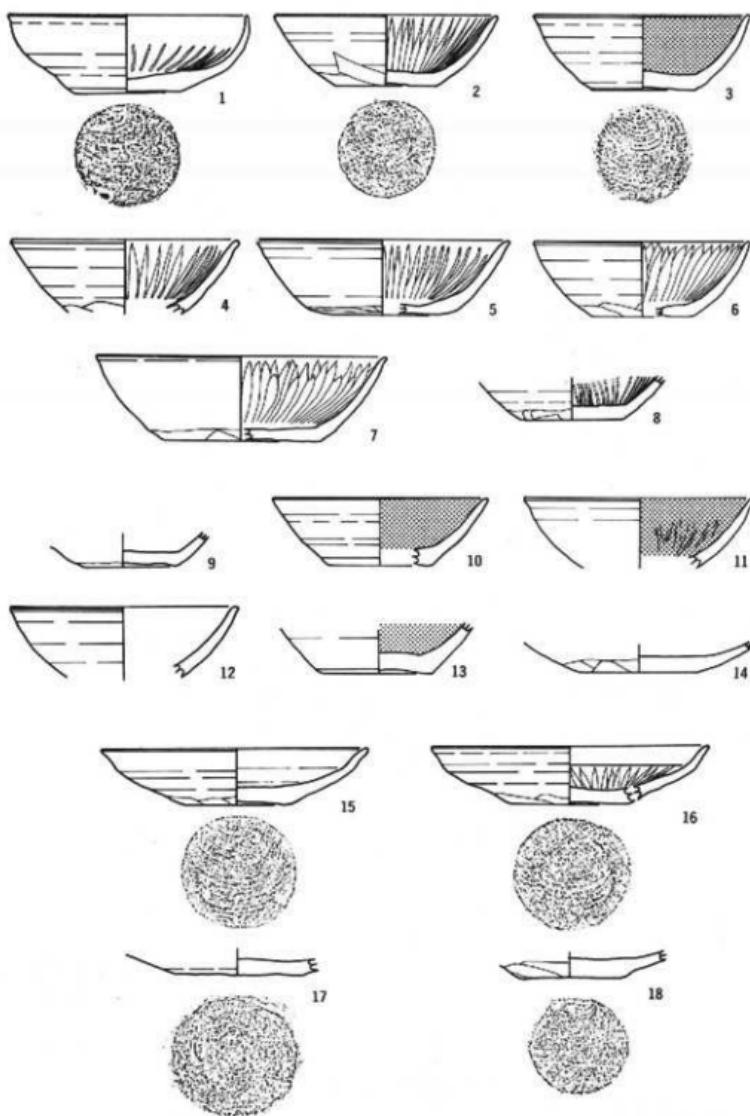
第12図 1号住居址出土遺物実測図

1 : 3



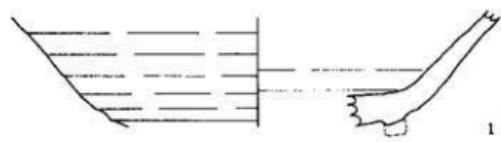
第13図 1号住居址出土遺物実測図

1 : 3

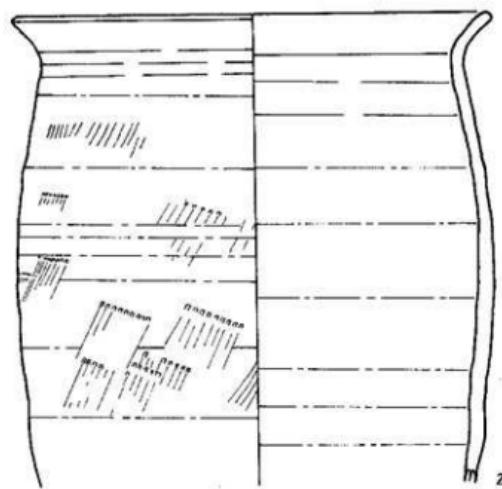


第14図 2号住居址出土遺物実測図

1 : 3



1



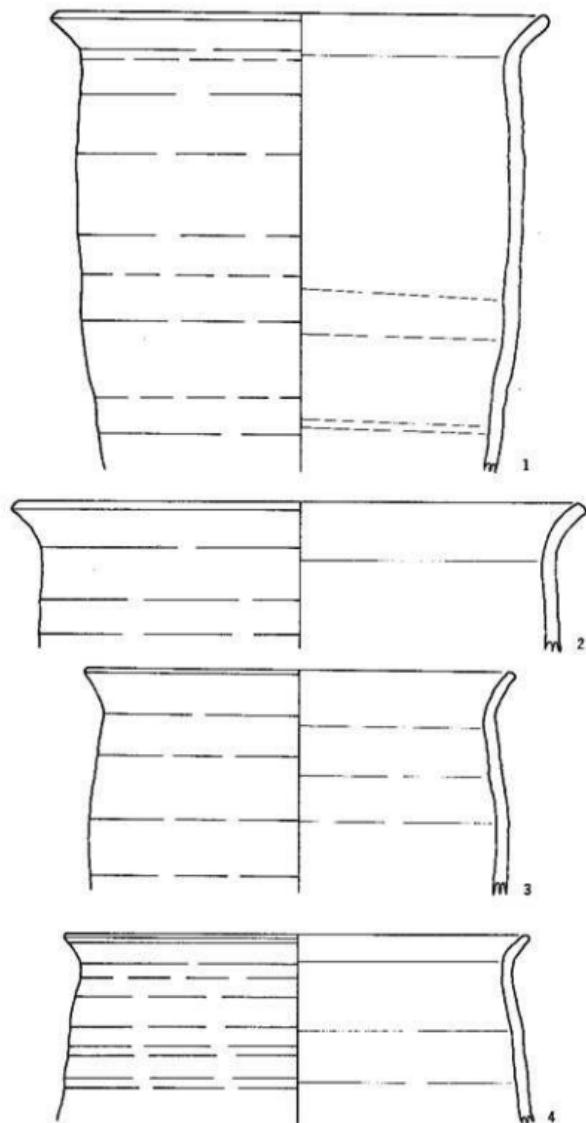
2



3

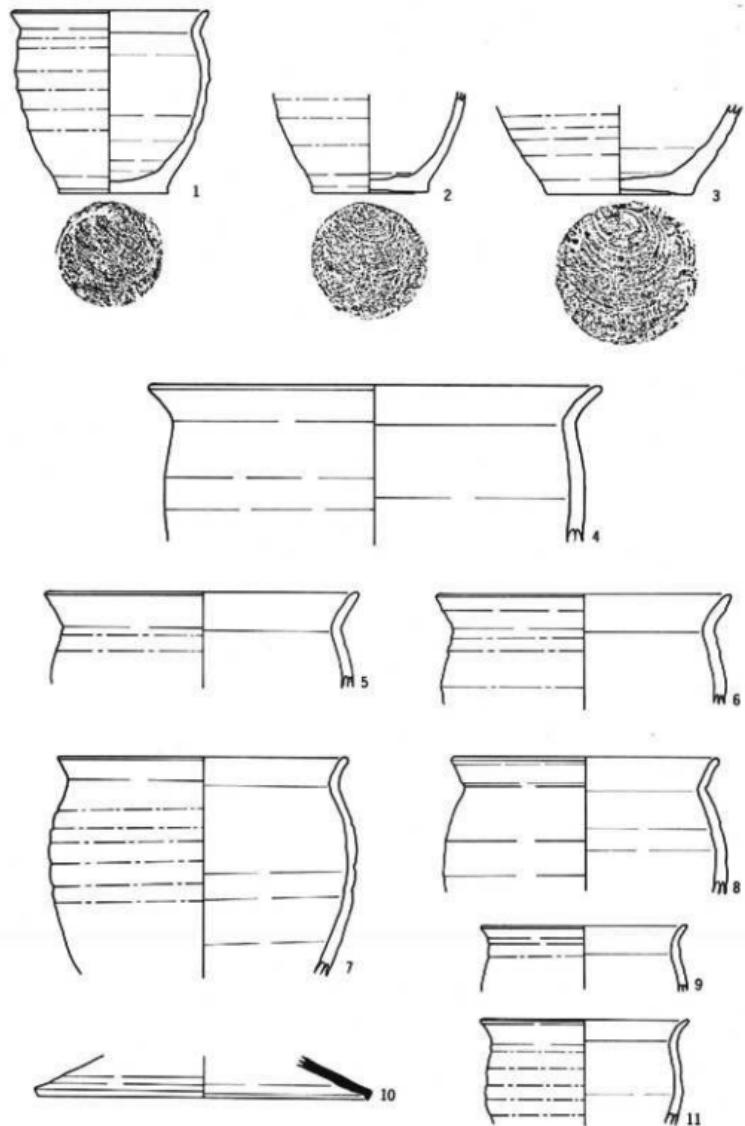
第15図 2号住居址出土遺物実測図

1 : 3



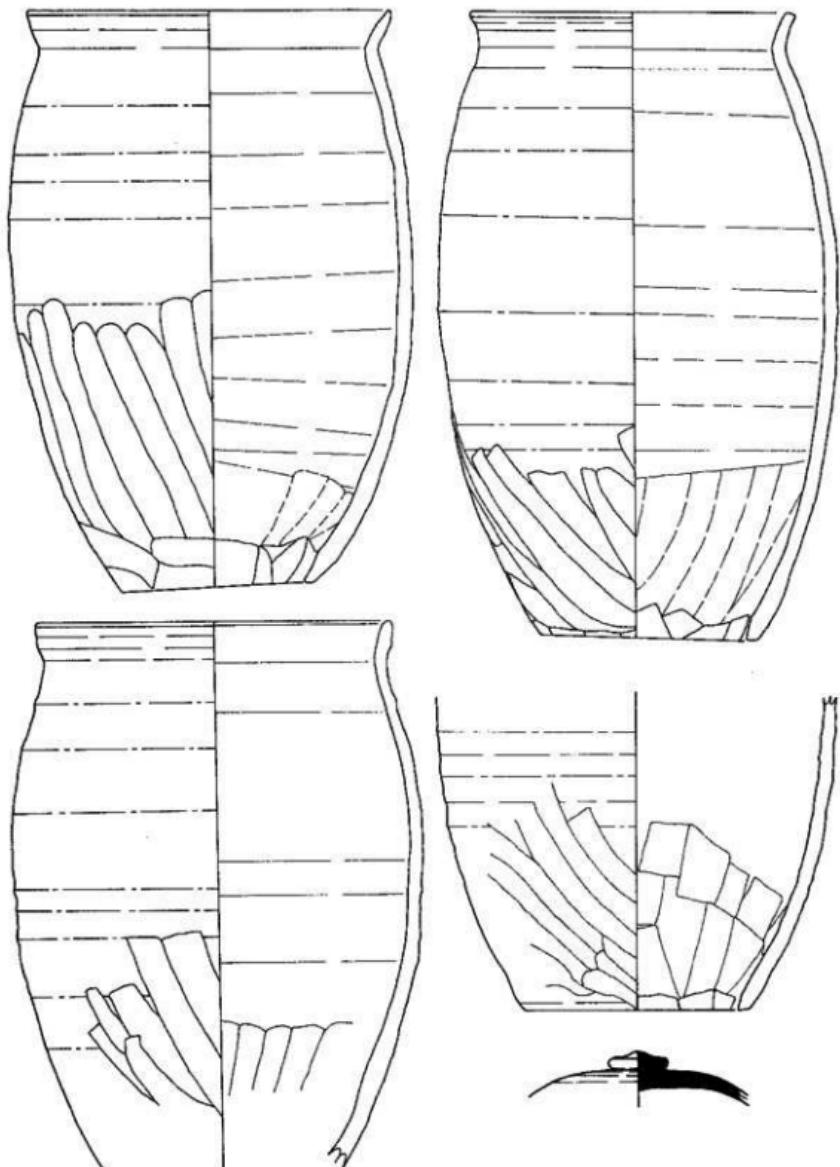
第16図 2号住居址出土遺物実測図

1 : 3



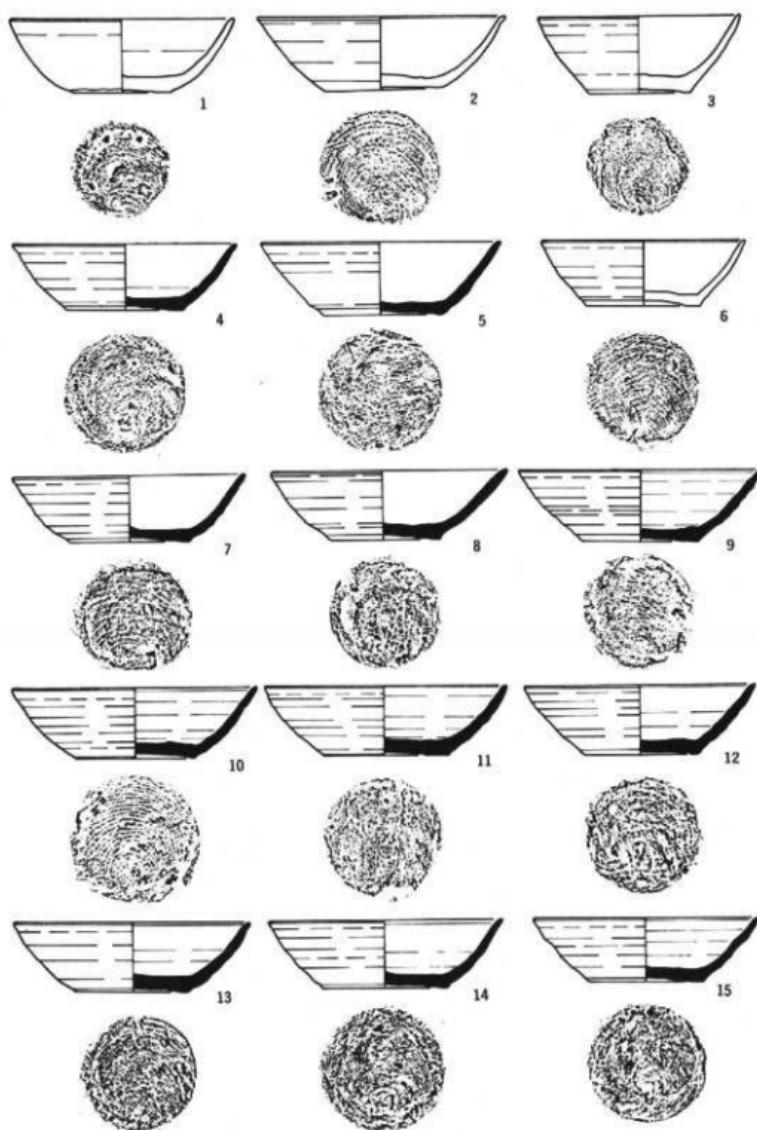
第17図 2号住居址出土遺物実測図

1 : 3



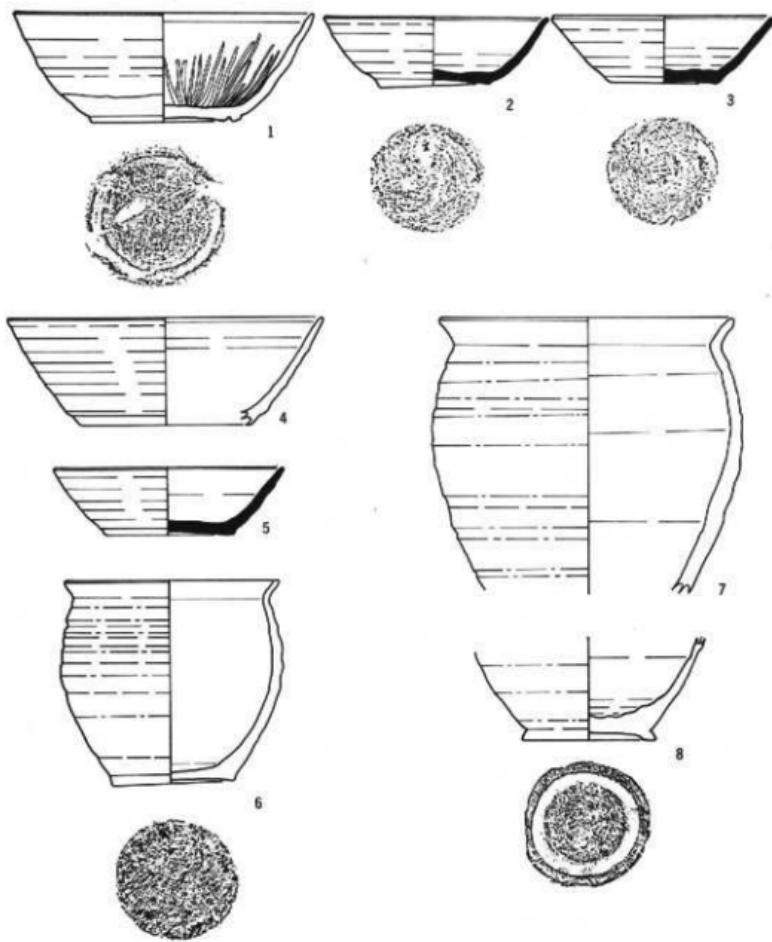
第18図 2号住居址出土遺物実測図

1 : 3



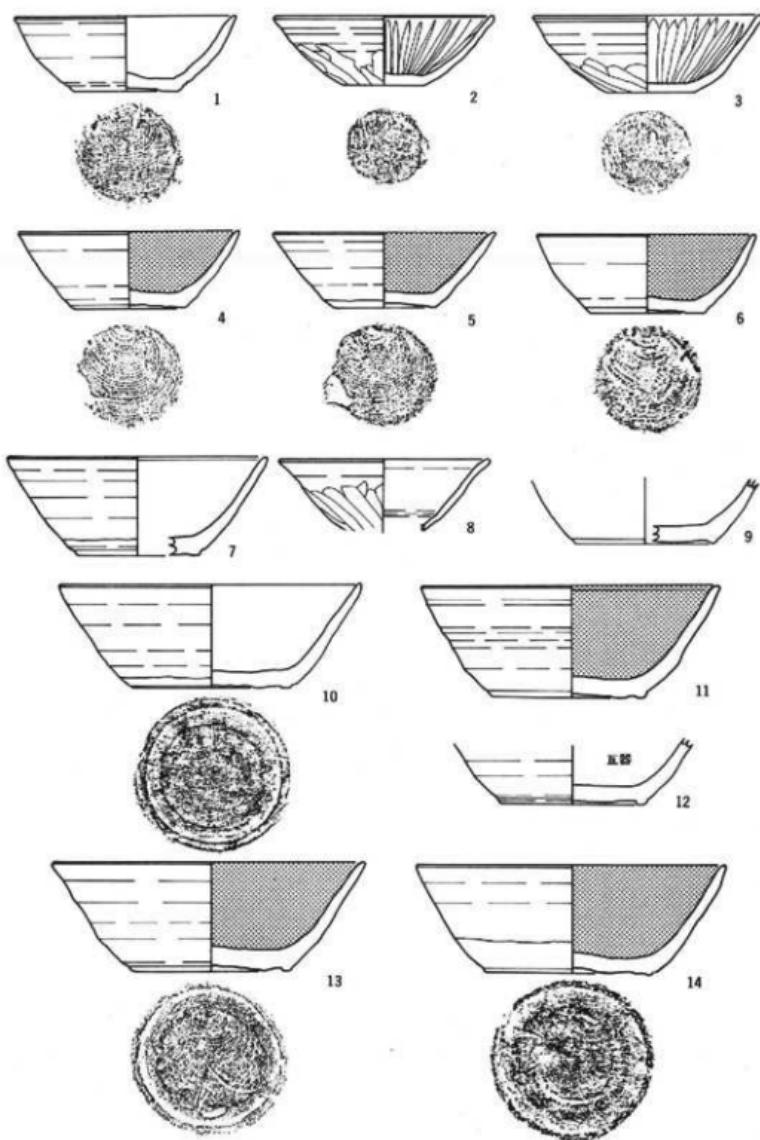
第19図 3号住居址出土遺物実測図

1 : 3



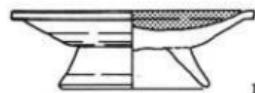
第20号 3号住居址出土遺物実測図

1 : 3



第21図 4号住居址出土遺物実測図

1 : 3



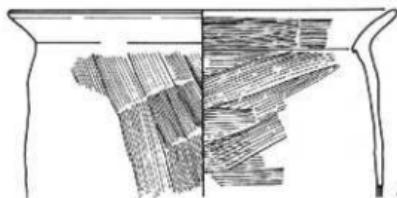
1



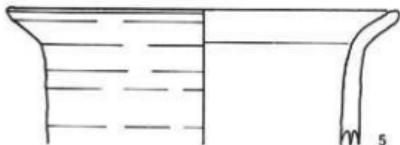
2



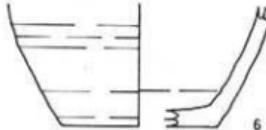
3



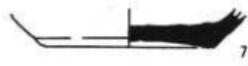
4



5



6



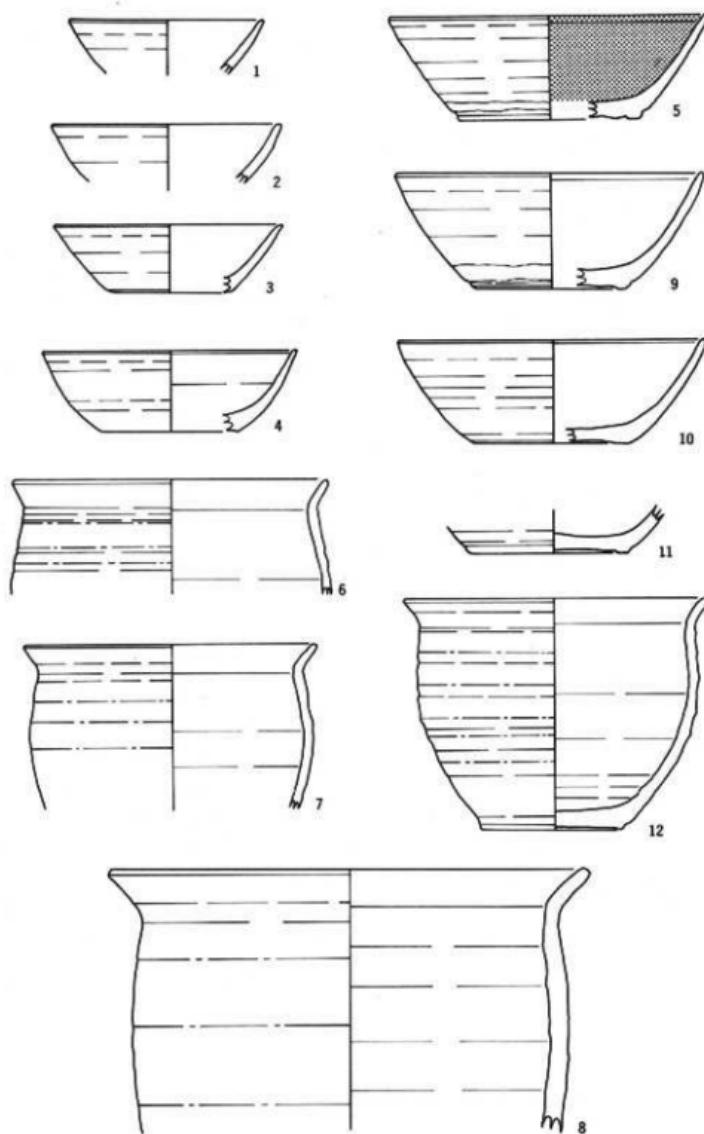
7



8

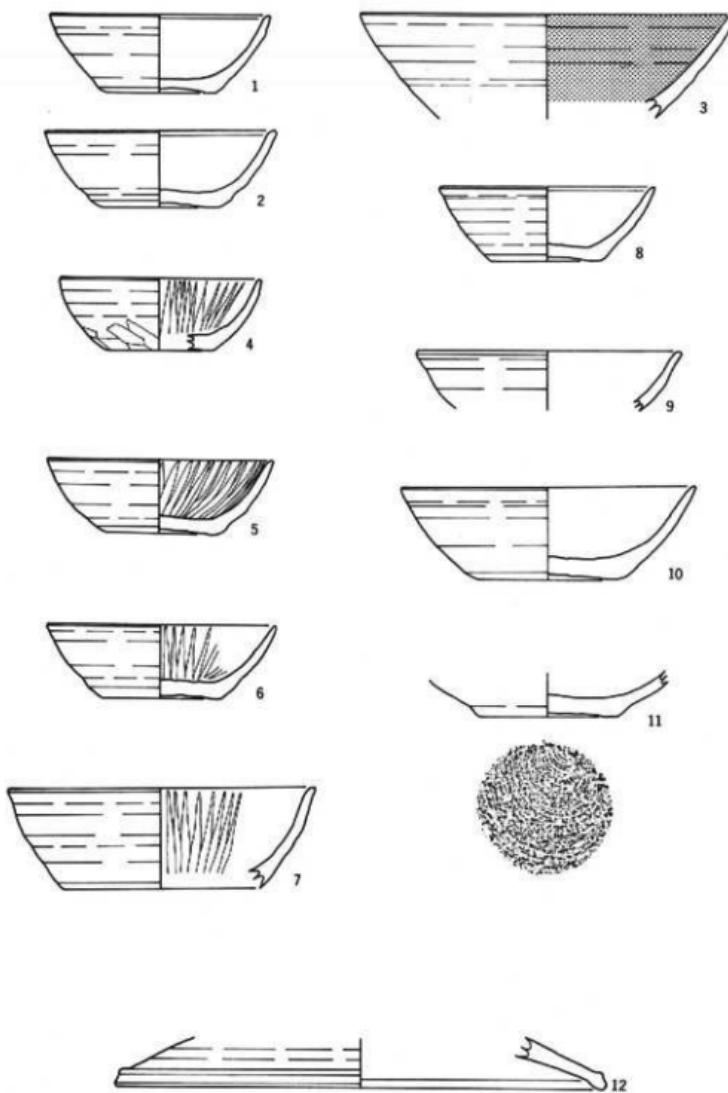
第22図 4号住居址出土遺物実測図

1 : 3



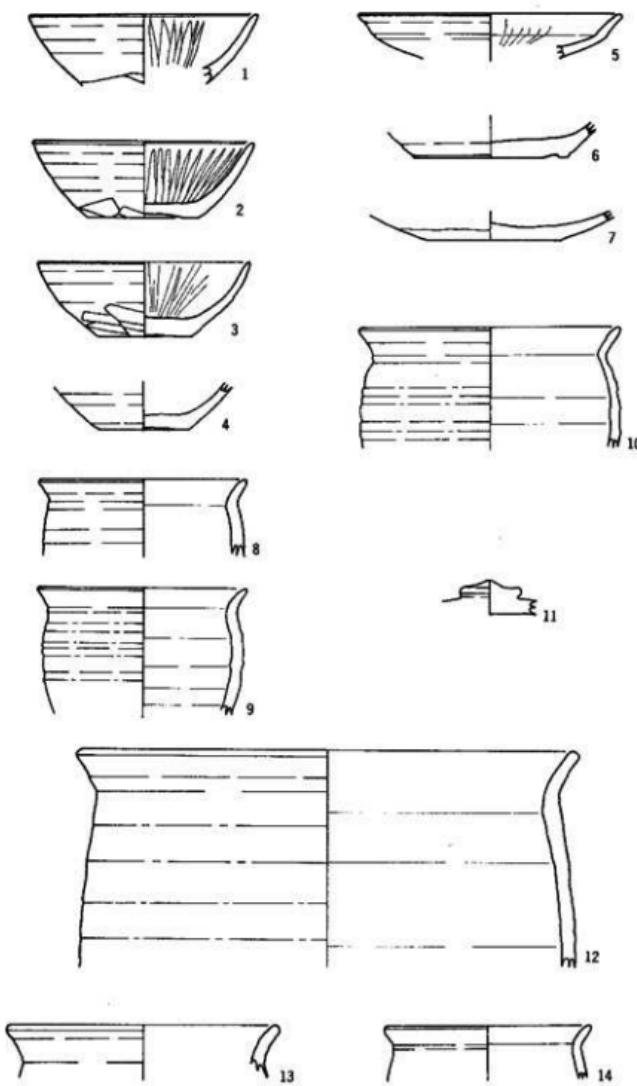
第23図 1号平窯（1～8）、2号平窯（9～12）出土遺物実測図

1 : 3



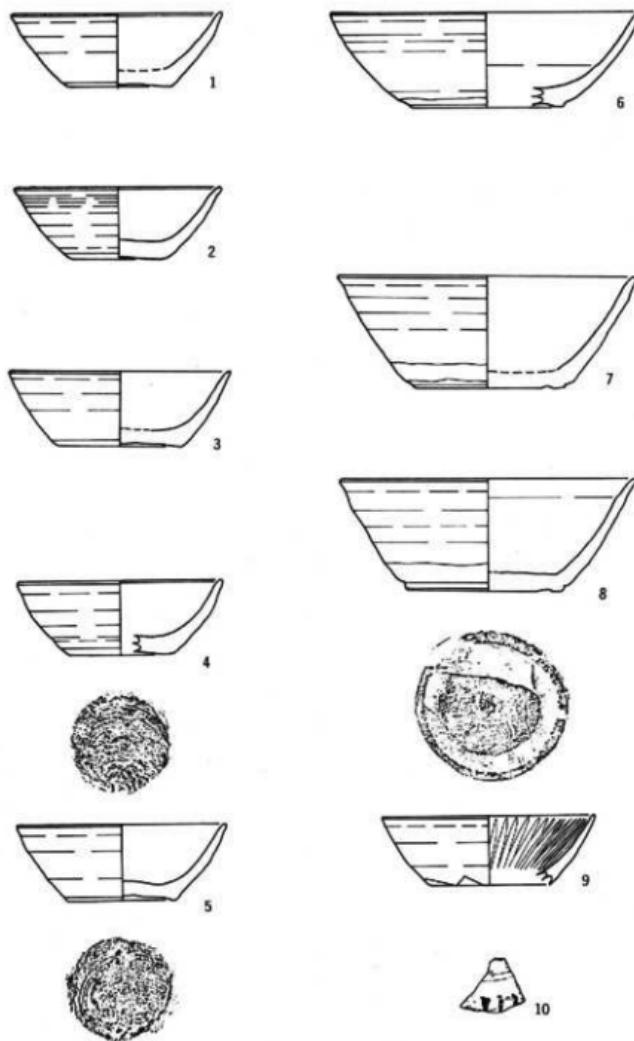
第24図 3号平窯（1～3）、4号平窯（4～12）出土遺物実測図

1 : 3



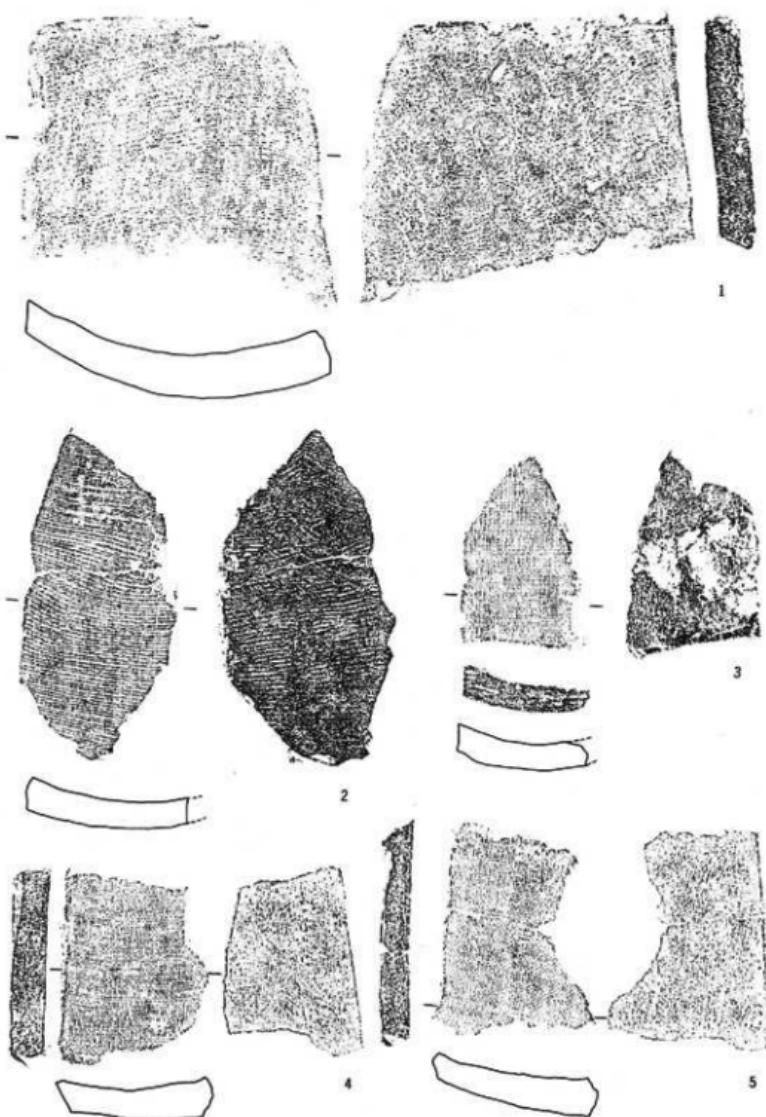
第25図 5号平窯（1～12）、6号平窯（13～15）出土遺物実測図

1 : 3



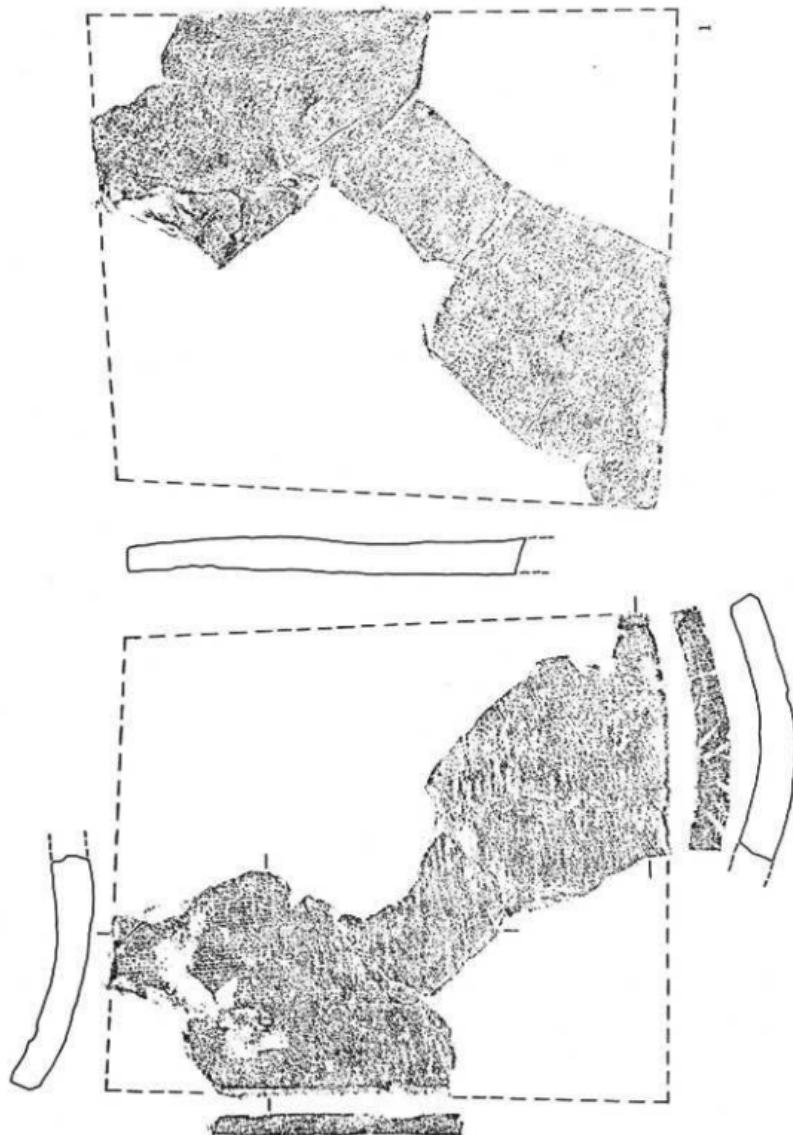
第26図 7号平窯（1～8）、掘立群（9）、表探（10）出土遺物実測図

1 : 3



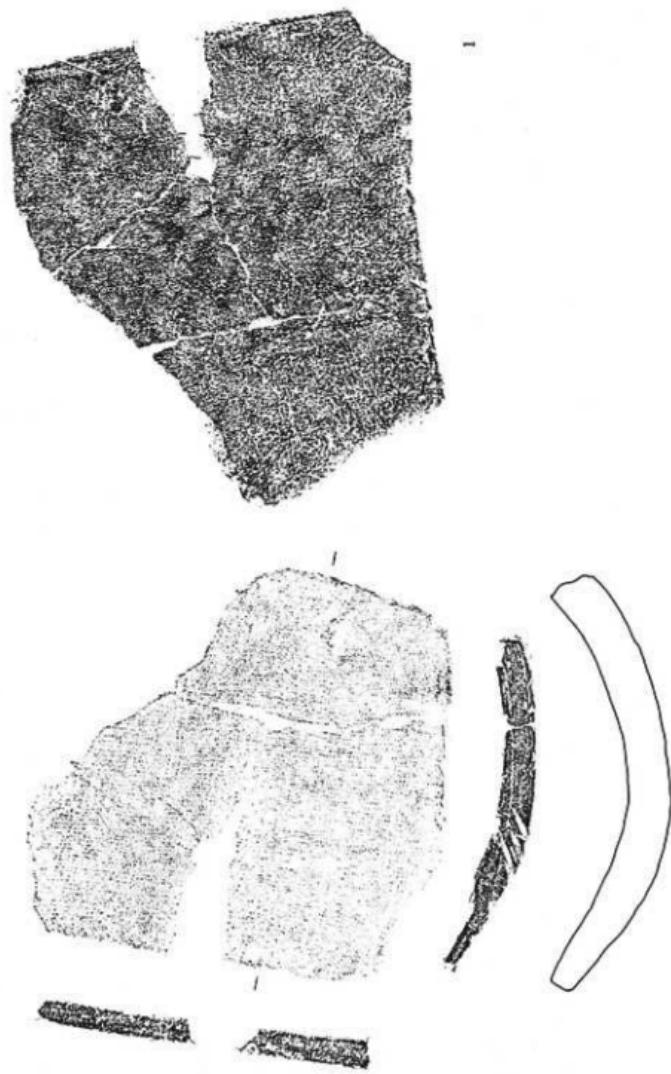
第27図 1号住居址、出土遺物実測図、平瓦

1 : 3



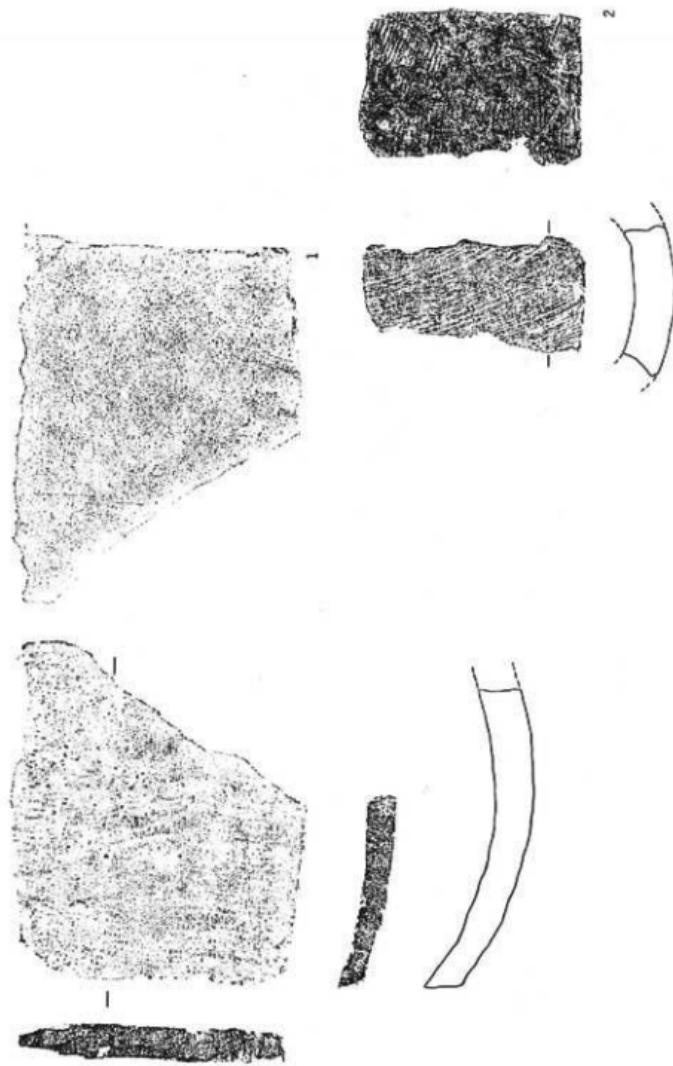
第28図 4号住居址、出土遺物実測図、平瓦

1 : 3



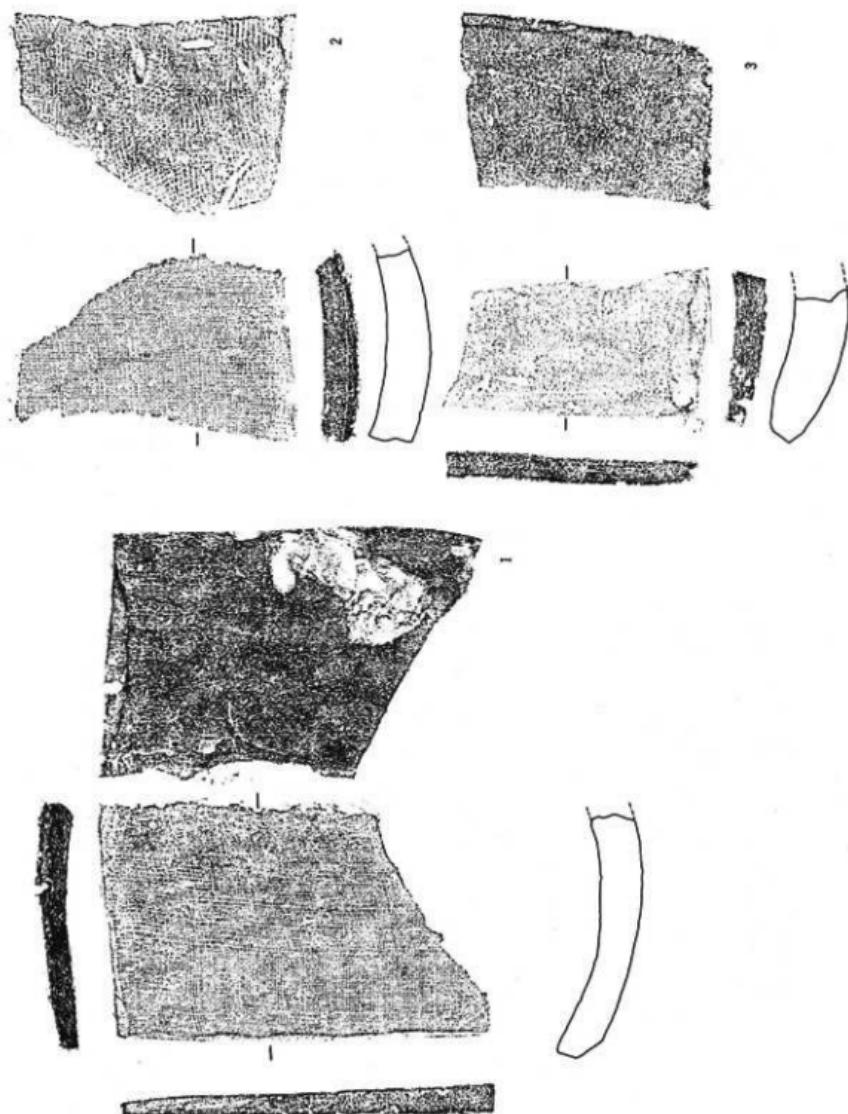
第29図 4号住居址、出土遺物実測図、平瓦

1 : 3



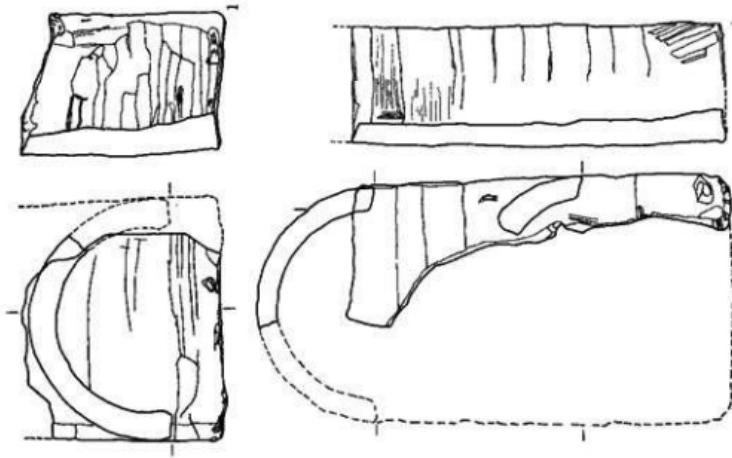
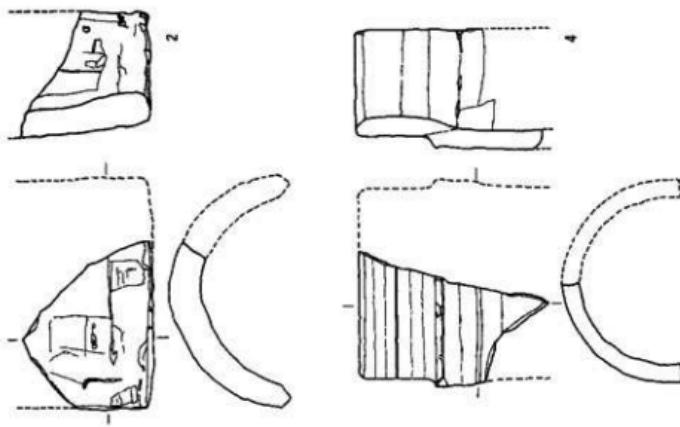
第30図 4号住居址、出土遺物実測図、平瓦

1 : 3



第31図 平窯 2、出土遺物実測図、平瓦

1 : 3



第32図 1号住居址、平窯2出土遺物実測図、瓦

1 : 3

出 土 遺 物 表

調査番号	出土地点	種類	器形	法量cm			形		
				口径	縦高	底径	口縁	脇外	脇内
11-1	1号住居	土師	环	11.1	3.9	4.5	外傾	ロクロ横ナデ	ヘラ磨き
2		〃	〃	11.2	4.1	5.1	〃	〃	ロクロ横ナデ ヘラ磨き
3		〃	〃	12.0	3.95	6.2	〃	〃	〃
4		〃	〃	11.0	3.95	5.0	〃	〃	ロクロ横ナデ
5		〃	〃	11.0	3.9	5.2	〃	〃	〃
6		〃	〃	12.4	4.3	5.9	〃	〃	〃
7		〃	〃	13.4	4.4	6.0	〃	〃	下半ヘラ磨き
8		〃	〃	12.7	4.2	6.1	〃	〃	
9		〃	〃	11.8	4.1	5.5	〃	〃	
10		〃	〃	12.0	4.0	6.6	〃	〃	
11		〃	〃	11.6	4.1	—	〃	〃	ヘラ磨き痕
12		高台付环	14.8	5.3	7.9	〃	〃	〃	ヘラ磨き
13		〃	〃	16.0	5.3	7.8	〃	下部ヘラ削り	ヘラ磨き
14		〃	〃	15.0	4.9	5.9	〃	ロクロ横ナデ	
15		瓦器	〃	14.8	6.1	8.1	—	下部ヘラ削り	ヘラ削り
12-1	土師	环	—	—	—	7.5	—	ロクロ横ナデ	
2	〃	〃	—	—	—	3.1	—	〃	ヘラ磨き
3	〃	〃	—	—	—	6.0	—	下部ヘラ削り	〃
4	〃	〃	—	—	—	8.5	—	〃	〃
5	〃	皿	13.0	2.6	5.4	外傾	ロクロ横ナデ	〃	
6	〃	〃	13.1	—	—	やや外反	—	—	
7	〃	〃	14.2	—	—	外傾	—	—	
8	〃	高台付皿	—	—	—	7.3	—	—	
9	須恵	环	—	—	—	4.7	—	—	
10	〃	蓋	10.3	—	—	—	—	—	
11	土師	甕	23.0	—	—	—	—	横ナデ	
12	〃	〃	15.4	—	—	—	輪	輪	横ナデ
13	須恵	蓋	16.3	—	—	—	—	—	
14	〃	甕	—	—	—	19.8	—	下部たたき痕	
15	土師	円筒	12.3	32.9	9.8	—	—	2cm内外の ヘラ削り	2cm内外の 輪積成形痕

方 法		施 土	焼 成	色 調		備 考
底 内	部 外			外	内	
	糸切り	細かい 石英、長石含む	良 好	白色がかった褐色	同左	外画タール附着
ヘラ磨き	"	石英、長石、雲母片 赤色粒子含む	"	白色がかった黄褐色	同左	放射状暗文
	ヘラ削り	細かい	"	暗褐色	同左	
下部放射状の ヘラ磨き	糸切り	荒い長石 石英、黒雲母含む	"	白色がかった褐色	同左	内外面茶褐色 の帯模様
"		細かい長石 石英、赤色粒子含む	"	白色がかった黄褐色	同左	底部磨耗 削詰一部欠損
	糸切り	細かい 石英、赤色粒子含む	"	"	黑色	下部放射状 暗文、口縁スズ附着
"		荒い、石英、砂粒 赤色粒子含む	"	"	同左	劣化する
"		細かい、黄母 石英、赤色粒子含む	"	灰白色	同左	"
		細かい 長石、赤色粒子含む	"	口縁部一部黒 白色がかった黄褐色	黑色	底部磨耗 口縁部欠損
		細かい 砂粒、赤色粒子含む	"	灰白色	黑色	劣化する
	糸切り	細かい 長石、赤色粒子含む	"	口縁部の一部スズ 附着、灰白色	黑色	劣化する
ヘラ削り	ヘラ削り	細かい	"	黄褐色	黑色	削出高台付 瓦器
放射状ヘラ磨き	ヘラ削り	細かい	"	口縁部一部黒 明褐色	黑色	削出高台付
		細かい 石英、赤色粒子含む	"	灰白色	黑色	劣化する
ヘラ削り	ヘラ削り	もうい	あらい	灰色	黑色	貼付高台
ヘラ磨き	糸切り后 ヘラ削り	細かい、赤色粒子含む	良 好	灰白色	黑色	削出高台付
"	糸切り	細かい	"	黄褐色	黑色	底部分残る
"	"	やゝ荒い	やゝもうい	黑色	黑色	劣化する
糸切り底不明 ヘラ削り		細かい、赤色粒子含む	良 好	黄褐色	黑色	削出高台分残る
	ヘラ削り	細かい、長石、石英 赤色粒子含む	"	白色がかった 明赤褐色	黑色	
		やゝ細かい	"	明褐色	同左	
		細かい	"	黄褐色	黑色	高台付風か
		やゝ細かい	"	明褐色	黑色	貼付高台
	糸切り	細かい	"	灰褐色	同左	"
		やゝ荒く砂粒子含む	"	暗灰褐色	"	
		"	"	暗褐色	黄褐色	口縁分残る
		やゝ荒く砂粒子含む	良 好	赤褐色	同左	底部欠
		やゝ細かい	"	灰色	"	劣化する
指箇ナダ后 ヘラ削り	ヘラ削り	やゝ細かい	"	灰色		底部のみ
		やゝ荒く砂粒子含む	"	茶褐色		一部欠損

試面番号	出土地点	種類	器形	法量cm			整 形		
				口径	筒高	底径	口 線	開 部	
								外	内
13-1	1号住居	土師	甕	15.0	14.0	7.4		輪 稲 ロクロ横ナデ	
2		*	*	—	—	—	7.6	*	*
3		*	*	—	—	—	5.6	*	*
4		*	*	30.8	—	—		縱方向刷々目	横方向刷々目
13-5	1号住居	鉄器	紡錘車	紡錘 5.1	紡室 31.4	—			
6		土製品		長径 5.2	短径 3.9	厚 0.8			
14-1	2号住居	土師	环	12.5	4.2	5.4		ロクロ横ナデ	同 上
2		*	*	11.7	3.8	5.2		ヘラ削り	ロクロ横ナデ
3		*	*	11.2	4.0	5.4	外頸	ロクロ横ナデ	*
4		*	*	12.0	3.9	—		ヘラ削り	*
5		*	*	11.4	4.0	5.4		ロクロ横ナデ 下部ヘラ削り	*
6		*	*	13.4	4.0	5.9		*	*
7		*	*	15.2	4.5	8.2		下部ヘラ削り ロクロ横ナデ	同 左
8		*	*	—	—	5.3		*	*
9		*	*	—	—	5.1		下部ヘラ削り	
10		*	*	11.3	3.6	4.9		ロクロ横ナデ	*
11		*	*	12.2	—	—		*	タテに削り痕
12		*	*	12.0	—	—		*	ヘラ削き
13		*	*	—	—	5.8		*	同 上
14		*	皿	—	—	6.0		ロクロ横ナデ 下部ヘラ削り	
15		*	*	13.9	3.05	5.9	外斜	*	ロクロ横ナデ 下部ヘラ削き
16		*	*	14.4	—	6.1		*	ロクロ横ナデ
17		*	*	—	—	6.7		下部ヘラ削り	*
18		*	*	—	—	5.4		*	
15-1		*	高台付坏	—	—	—			
2		*	甕	25.4	—	—	外反	ロクロ横ナデ	同
3		*	*	27.2	—	—	*	*	*
16-1		*	*	26.2	—	—		*	*
2		*	*	30.2	—	—		*	*
3		*	*	23.2	—	—		*	*

方 法		胎 土	施 成	色 調		備 考
底 内	外			外	内	
	素切り	やや荒い	やや もろい	暗赤褐色	同左	
	*	荒く砂粒子含む	良	暗褐色		
	*	やや荒く 砂粒子含む	*	褐色		
		荒い、細かい粒子 石英(或は長石)多く含む	良 好	暗褐色	外面より明るい 赤褐色	口縁と腹部の 一部のみ残る
				黃褐色		
	ヘラ削り	やや荒い赤色 粒子、石英、砂粒子含む	良 好	明赤褐色	底部の分が 赤褐色	放射状暗文
	素切り後 ヘラ削り	細かい 赤色粒子含む	*	*	明赤褐色	花弁状暗文
	素切り	*	*	*	黒色と一部 黄褐色	口縁、腹部 の一部欠損
底部欠損		細かい	*	赤褐色	同左	花弁状暗文
	ヘラ削り		*	本褐色混りの 黄褐色	赤褐色	花弁状暗文 残る
	素切り後 ヘラ削り	南	*	赤褐色	同左	*
	ヘラ削り	南	*	赤褐色	同左	残る
	*	石英、長石 赤色粒子含む	*	*	*	底、腹の一部残る 放射状暗文
	素切り痕	細かい 砂粒子含む	*	黄色がかった 灰白色	*	
	ヘラ削り	細かい 長石、石英、砂粒子含む	*	明赤褐色	黑色	
		やや細かい	*	黄褐色	黑色	
		細かい	*	茶褐色、外周の 一部黒色混ざる	黑色	腹部より口縁部 残る
	素切り	やや細かい	*	赤褐色	黑色	
	素切り後 ヘラ削り	細かい	*	赤褐色	同左	暗文
	ヘラ削り	やや荒い 赤色粒、石英、砂粒子含む	*	明赤褐色	底部の分赤褐色	残る
	素切り後 ヘラ削り	南 *	*	赤褐色	同左	花弁状暗文 底部の分残る 花弁状暗文
	*	軋い	*	褐色	同左	
	*	南	*	赤褐色		暗文
	素切り後 ヘラ削り	南 細かい砂粒子含む	*	明黄褐色	暗赤褐色 一部黄黒茶褐色	貼付高台付
		やや荒く 砂粒子含む	*	暗褐色	暗褐色	
	*	*	*	*	*	
		やや荒い	*	茶褐色	同左	
		*	砂粒子含む	明赤褐色	*	口縁部灰褐色 外側に削り痕あり
		*	*	茶褐色	*	

調査番号	出土地点	種類	器形	法量cm			整 形		
				口径	器高	底径	口縁	側部	内
16-4	2号住居	土師	甌	24.8	—	—		ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
17-1		土師	甌	10.45	9.7	5.8		ロクロ横ナデ	#
2		#	#	—	—	6.2		#	#
3		#	#	—	—	7.8		#	#
4		#	#	24.8	—	—		#	#
5		#	#	16.6	—	—		#	#
6		#	#	14.2	—	—		#	#
7		#	甌	15.4	—	—			#
17-8	2号住居	#	#	15.7	—	—			#
9		#	甌	10.9	—	—			#
10		須恵	甌	18.0	—	—		ロクロ横ナデ	#
11		土師	甌	11.1	—	—		#	#
18-1		土師	甌	19.4	30.6	10.2		ロクロ横ナデ 下半ヘラ削り	ロクロ横ナデ 下半ヘラナデ
2		#	#	17.2	33.3	11.6		ロクロ横ナデ 下半ヘラ削り	ロクロ横ナデ 下半ヘラナデ
3		#	#	19.0	—	—		ロクロ横ナデ 下半ヘラ削り	ロクロ横ナデ 下半ヘラナデ
4		#	#	—	—	12		#	ロクロ横ナデ 下半ヘラナデ
5		須恵	甌	—	—	—		上半ヘラ削り ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
19-1	3号住居	土師	环	11.7	3.9	5.1	外傾	ロクロ横ナデ	#
2		#	#	12.9	4.0	5.7	や、外傾	#	#
3		#	#	10.6	4.1	5.4	外傾	#	#
4		須恵	#	11.7	3.5	6.1	#	#	#
5		#	#	12.4	3.9	6.4	#	#	#
6		#	#	10.7	3.5	6.0	#	#	#
7		#	#	12.2	3.5	6.3	#	#	#
8		#	#	12.2	3.7	5.8	#	#	#
9		#	#	12.8	3.8	5.6	#	#	#
10		#	#	12.8	3.8	6.3	#	#	#
11		#	#	12.6	3.7	6.6	#	#	#
12		#	#	12.2	3.7	6.0	#	#	#
13		#	#	12.3	3.7	6.1	や、外傾		#

方 法		胎 土	焼 成	色 調		
底 部				外	内	
内	外					
		雲母、砂粒含む やゝもろ く薄い	黄褐色	同左		
	系切り	やゝ荒く砂粒子含む 良 好	暗褐色	暗褐色		
	〃	やゝ荒い	赤褐色	同左		
	〃	やゝ荒く砂粒子含む 〃	褐色	黑褐色		
		〃	茶褐色	同左		
		やゝ荒い	赤褐色	褐色		
		やゝ荒く砂粒子含む 〃	暗黃褐色	暗褐色	分残る	
		〃	黄褐色	同左		
		やゝ細かい	赤褐色	〃	口縁分残る	
		やゝ荒く砂粒子含む 〃	〃	〃		
		やゝ細かく砂粒子含む 〃	暗褐色	〃		
		やゝ荒く砂粒子含む 〃	黄褐色	〃		
紙ヘラ削り	横位ヘラ削り	やゝ荒く砂粒子含む 良 好	茶褐色	同左		
横位ヘラ削り	紙ヘラ削り	〃	〃	〃		
		〃	灰褐色	〃	底部欠損	
紙ヘラ削り	横ヘラ削り	雲母、砂粒子 含み荒い	赤褐色	〃	脇部下、底崩れ	
		〃	黒褐色	〃		
	系切り	やゝ荒く 砂粒子含む 良 好	明褐色	同左	放射状暗文	
	〃	やゝ細かく 赤色粒子含む 〃	白色がかった黄褐色		内部に細かい斜構 内部に細かく飛んでる	
	〃	〃	ヌメ付着 灰白色	明黃褐色	分残る	
	〃	荒い、白色の粒 長石の粒子含む 細かい砂粒子含む	灰褐色	同左	- 部欠損	
	〃	細かい砂粒子含む 密、白色の細かい 粒子と赤色粒子含む	〃	〃	内外面ヒビ	
	〃	荒い 砂粒子多く含む やゝ軟弱	白色がかった黄褐色	〃		
	〃	荒い 白色の軟多く含む 不 良	灰白色	〃	口縁の一部ス テて黒づむ	
	〃	〃	ヒビ多い 不 良	灰色がかった褐色	口縁の一部 白色が残っている	
	〃	〃	〃	〃	器形ゆがむ	
	〃	〃	〃	〃	〃	
	〃	〃	〃	〃	口縁一部欠損	
	〃	〃	〃	灰色がかった黄褐色	〃	分残る

両面番号	出土地点	種類	器形	法 直cm			整 形		
				口径	器高	底径	口 線	胴 部	
								外	内
19-14	3号住居	須恵	环	12.3	3.6	6.6	外傾	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
15				11.9	3.4	6.1		#	
20-1		土師	高台付 环	15.8	6.8	7.2	外傾	ロクロ横ナデ 下部ヘラ削り	#
2		須恵	环	11.7	3.8	5.7	外反	ロクロ横ナデ	#
3		#	#	11.6	3.6	5.8	外傾	#	#
4		土師	高台付 环	16.4	5.7	8.9	#	#	#
5		#	#	12.3	3.6	6.6	#	#	#
6		土師	甌	11.3	10.9	6.4		輪積	横ナデ
7		#	#	15.4	—	—		ロクロ横ナデ	#
8		須恵	甌	—	—	7.0		#	#
9		#	甌	24.2	—	—		#	#
21-1	4号住居	土師	环	11.6	4.0	5.4	外傾	ロクロ横ナデ	#
-2		#	#	11.5	3.7	4.2	#	# 下半ヘラ削り	#
3		#	#	12.2	4.1	4.8	#	# ヘラ削り	#
4		#	#	11.6	4.1	5.9	#	ロクロ横ナデ	#
5		#	#	11.7	4.0	5.4	#	# 下半ヘラ磨き	
6		#	#	11.7	4.2	6.0	#	#	#
7		#	#	13.5	5.3	6.3	#	#	ロクロ横ナデ
8		#	#	11.0	—	—	外反	# 下半ヘラ削り	#
9		#	高台付环	—	—	7.6			#
10		#	#	15.9	5.5	8.3	外傾	ロクロ横ナデ 下半ヘラ削り	#
11		#	#	15.4	6.0	8.0	#	ロクロ横ナデ	ヘラ磨き
12		#	#	—	—	5.6		#	ロクロ横ナデ
13		#	#	16.5	5.8	8.0	外傾	#	ヘラ削り后ヘラ磨
14		#	#	16.35	5.7	8.7	#	# 下半ヘラ削り	ロクロ横ナデ ヘラ削り
22-1		土師	高台付 甌	12.8	4.1	7.9	肥厚	ロクロ横ナデ	ヘラ磨き
2		#	甌	—	—	6.8		ロクロ横ナデ	横ナデ
3		#	#	—	—	8.4		縱方向ハケ目	横方向ハケ目
4		#	#	20.4	—	—		#	#
5		#	#	20.5	—	—		ロクロ横ナデ	横ナデ

方 法		施 土	焼 成	色 調		
底 内	部 外			外	内	
	系切り	荒い 白色の粒多く含む		灰色がかった褐色	同左	口部一部欠損
		荒い 雲母、砂粒子含む	底部ヒビ 不 良	灰色がかった黄褐色	*	汚穢る
ヘラ削り	ヘラ削り	荒い 白色粒子含む	良 好	明褐色	同左	放射状暗文
	系切り	*	口縁と底不規 一部ヒビ	灰褐色	*	口縁一部欠損
	*	密、砂粒子含む	*	*	*	*
		荒い 白色の粒子含む	底 部	明赤褐色	*	底部外面剥離
	系切り	やゝ荒く 砂粒子含む	不 良 ヒビ多い	灰色がかった褐色	*	口縁一部欠損
	*	*	良 好	茶褐色	*	
	*	細かい砂粒子含む	やゝもろい	黄褐色	*	底部欠損
		細かい 白色の砂粒子含む	良 好	赤褐色 下半自然釉	*	貼付高台
		やゝ細かい 雲母含む	*	灰黑色	*	口縁部の一部残る
	系切り	細かい 赤色粒子含む	良 好	明黄褐色	*	高脚成形 貼付高台
	ヘラ削り	細かい	*	明赤褐色	*	山線一部スズ付着 花弁状暗文
	*	*	*	赤褐色	*	花弁状暗文
下半ヘラ削り	系切り	細かい 白色、長石、砂粒子含む	*	黄褐色	*	
	*	細かい	*	灰褐色	黒色	
	*	細かい 赤色粒子含む	*	黄褐色	*	
		*	*	灰褐色	*	削出高台付 底部一部欠損
		もろい	*	明赤褐色	同左	底部欠損
	系切り所へら削り	細かい砂粒子含む	やゝ悪い	黑褐色	黒色	削部下半、底部残る
	系切り	*	良 好	灰褐色	黒色	削出高台付
	*	細かい白色の粒 石、雲母、砂粒子含む	*	*	*	*
	ヘラ削り	細かい	*	灰褐色	黒色	削出高台付 頭部下半、底部残る
	系切り所へら削り	細かい砂粒子含む	*	明褐色	黒色	削出高台付
	ヘラ削り	細かい砂粒子含む	*	黄褐色	黒色	*
ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ	細かい	良 好	黄褐色	黒色	貼付高台
	系切り	やゝ荒い 雲母、砂粒子含む	*	赤褐色	同左	胸部下半、底部残る
木葉痕		やゝ荒い 砂粒子含む	*	暗褐色	*	*
		やゝ荒い 長石、砂粒子含む	*	暗赤褐色	*	口縁、胸部上半残る
		やゝ荒い 雲母、砂粒子含む	*	黒褐色	*	*

両面番号	出土地点	種類	器形	法量cm			整 形		
				口径	器高	底径	口 線	脚 外	部 内
22- 6	4号住居	土 鍋	甌	-	-	8.0		ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ
7		須恵	#	-	-	9.0		#	#
8		鉄 器	鍔 銛	-	-	-			
23- 1	平窓1	土 鍋	环	10.2	-	-	外傾	ロクロ横ナデ	ヘラ磨き
2	"	"	#	12.0	-	-	#	#	#
3	"	"	#	12.0	3.6	6.0	#	#	#
4	"	"	#	13.4	4.3	7.0	#	ヘラ磨き	#
5	"	"	高台付环	16.8	5.5	9.4	#	ロクロ横ナデ	#
6	"	"	甌	16.6	-	-		#	同左
7	"		#	15.4	-	-		#	ロクロ横ナデ
8	"		#	25.4	-	-		#	#
9	平窓2	土 鍋	高台付 手	16.2	6.15	8.0	外傾	ロクロ横ナデ	ヘラ磨き
10	"	"	#	16.2	5.4	7.8	#	#	#
11	"	"	#	-	-	7.9		ヘラ削り	ヘラ磨き ヘラ削り
12	"	"	甌	16.4	12.4	4.2	やや外反	ロクロ横ナデ	同左
24- 1	平窓3	土 鍋	环	11.6	4.2	5.6	外傾	ロクロ横ナデ	ヘラ磨き 下半ヘラ削り
2	"	"	#	12.2	4.1	6.0	#	#	ヘラ磨き
3	"	"	#	19.8	-	-	#	#	#
4	平窓4	"	#	10.6	3.85	5.6	#	下半ヘラ削り	ロクロ横ナデ
5	"	"	#	12.0	4.0	5.5	#	ロクロ横ナデ	#
6	"	"	#	12.1	3.9	6.4	#	#	#
7	"	"	#	14.2	-	-	やや外反	#	#
8	"	"	#	11.2	4.0	5.7	外傾	#	#
9	"	"	#	14.0	-	-	やや外反	#	ヘラ磨き
10	"	"	#	15.6	4.9	7.4	外傾	#	#
11	"	"	皿	-	-	7.1		#	#
12	"	"	甌	26.0	-	-	肥厚	#	#
25- 1	平窓5	杯	土 鍋	12.2	-	-	外傾	下部ヘラ削り	ロクロ横ナデ
2	"	"	#	11.7	4.0	5.8	#	ロクロ横ナデ	#
3	"	"	#	11.5	4.0	4.6	#	下部ヘラ削り	#

法 法		胎 上	燒 成	色 調		備 考
底 部	内 外			外	内	
	糸切り	やや荒い 黒母、砂粒子含む	良 好	褐色	同左	
	#	* 砂粒子含む	*	灰黑色	*	底部のみ
		細かい	良 好	黄褐色	薄赤褐色	底部欠損
		やや細かい 砂粒子含む	*	明赤褐色	同左	劣化る
ロクロ横ナデ	糸切り	やや細かい	*	明黃褐色	同左	劣化る
		細かい	*	黄褐色	同左	劣化る
		やや細かい	*	黄褐色	黑色	削出高台
		やや荒い 砂粒子含む	*	赤褐色	暗褐色	劣化る
		*		黑褐色	同左	口縁の劣化る
		*	良 好	赤褐色	暗黃褐色	劣化る
		細かい	*	黄褐色	一部黑色	削出高台
		やや細かい	*	黑褐色	同左	*
	糸切り	細かい	*	灰黑色	分黒褐色 分赤褐色	削出高台
	#	やや荒い	*	暗褐色	同左	
ヘラ磨き	糸切り	やや細かい 白黒、雪崩少し含む	良 好	黄褐色	黑色 分 暗赤褐色 分	劣化る
#	#	細かい	*	暗褐色	同左	劣化る
		*	*	暗黃褐色	黑色	劣化る
	ヘラ削り	やや細かい	*	明赤褐色	同左	劣化る 花弁状暗文
ロクロ横ナデ	糸切り	砂粒子含む	*	赤褐色	同左	*
	#	やや細かい	*	明赤褐色	同左	*
		*	*	*	同左	花弁状暗文
	糸切り	石英、赤色粒子含む	*	*	同左	劣化る
		細かい	*	薄赤褐色	同左	
	糸切り	こまかい	*	黄褐色	黒褐色部分多し	劣化る
	#	やや細かい	*	赤褐色	同左	劣化る
		*	*	黄褐色	同左	
		細かい	良 好	赤褐色	同左	劣化る 花弁状暗文
	糸切り後ヘラ削り	やや細かい	*	黄褐色	同左	花弁状
	#	やや荒い	*	暗褐色	同左	

V ま と め

今回の大小久保遺跡の調査は、山梨県初の土師製作址の発見という大きな成果を得た。ここに若干の考察と問題点を記してまとめたい。

1. 出土土器の編年的位置づけ

大小久保遺跡で出土した遺物は、「甲斐型」の壺や皿などの甲府盆地系のものと、小型壺や内黒土器などの長野系の2系統が強く影響している。また、現在他にあまり出土例をみない「内黒削り出し高台付壺」など本遺跡独特の器形をもつものなどがある。これらは本遺跡の遺物の様相が一地方的なものであることを示唆している。

現在、発表されている長野・山梨の編年の年代観には若干のずれがある。そこで編年体系がほぼ確立している山梨編年の中で大小久保遺跡の土器を位置づけてみたい。まず、位置づけに際して甲府盆地系の土器と共通点がある壺と皿を対象とした。壺は底径／口径比の%を目安とした。

山梨編年での皿はVII期（9世紀第4四半期）から出現する為、壺もVII期前後を検討した。山梨編年での壺の推移は下記のようになっている。

VII期（9世紀第3四半期） 底径は6.5cm前後で底径／口径比は50～60%付近。

VIII期（9世紀第4四半期） 底径は5.5cm前後で底径／口径比は44～50%付近。

IX期（10世紀第1四半期） 底径は4.4cm前後で底径／口径比は36～44%付近。

大小久保遺跡の各遺構ごとの壺の底径と底径／口径比の%は下記のようになる。（平均値）

	内黒土器壺A	土師器壺B	土師器壺C	土師器壺D	須恵器壺A			
	底径	口径比	底径	口径比	底径	口径比	底径	口径比
1号住	6.1cm	51%	5.4cm	45%	5.5cm	47%	5.5cm	45%
2号住	5.4cm	46%			5.4cm	43%		
3号住			5.4cm	46%			6.1cm	50%
4号住	5.8cm	49%	5.4cm	47%			4.5cm	38%
平塗1			6.5cm	51%				
3			5.8cm	49%				
4			6.6cm	49%	6 cm	50%		
5							5.2cm	46%
7			5.7cm	51%				
竪穴群							3.8cm	34%
平均	5.7cm	49%	5.8cm	48%	5.6cm	49%	4.8cm	41%
							6.1cm	50%

全体の平均は底径 5.6cm 底径／口径比は47%となる。この数値から大小久保遺跡は山梨編年のⅧ期（9世紀第四半期）に位置づけられる。さらに、遺跡跡内では2号住と5号平窯、1～3号平窯の切り合いで3時期（前中後）に大別できる。前期は2号住にあたる。坏（第14図1、11、12）の体部が強く丸味をもって張り出し放射状の暗文があり、口唇部が外反する。中期は3、4、5号平窯と堅穴群の坏（第24図、第25図1～13、第26図9）で胸部がやや丸味をもって張り出している。花卉状の暗文や器体下部にヘラ削りをもつものがある。後期は1、4号住1、2、7号平窯の遺物（第11図、第12図1～8、第21図、第22図1、第23図1～5、9～11、第26図1～8）でヘラ削りのない坏、削り出し高台付坏、高台付皿などがある。3号住もこの時期にあたると思われる。また、中後期の時間差はごくわずかであると考えられる。以上から当遺跡の出土遺物の編年をまとめると下記の様になる。

山梨編年Ⅷ期 (9世紀第4四半世紀)	大小久保前期 2号住
	中期 3～5号平窯、堅穴群 後期 1、3、4号住、7号平窯

このような年代観から、内黒土器（黒色土器）の出現期や1号住出土の瓦器（第11図15）の問題、須恵器生産の問題など、その他多くの問題を示す結果となった。紙面の関係で論述はできなかったが、今後山梨編年の補正資料となるものと思う。

④ 2. 平窯

登り窯に対して地山を掘りくぼめただけの構造をもつものを平窯とした。プランは不整の円形・楕円形をしている。7号平窯の東にピットが1ヶ所発見されたが、その他上部構造の可能性を示すピット類はなかった。7号平窯から内黒土器杯A・Bの内面黒色処理前の器体焼成中に破損し放置された一括土器が出土している。この様子から、器体焼成後高温時に窯内より取り出して内面黒色処理をするには、平窯の上部構造はむしろない方がよく、あっても土器をすぐ取り出せる構造であったと考えられる。本遺跡の平窯数は8基と瀬谷子遺跡や水深遺跡の様相と異なる。したがって使用期間は短期間かつ断続的（季節的なものか）なもので規模も小さいものであったと思われる。

3. 工房址

1号住を工房址と考え、3号住は工房址の可能性が強く、両者とも住居内に粘土溜めをもつ。特に、1号住からは新開遺跡で便宜上いわれた「ロクロピット」^⑥（ロクロあるいは回転台等のものを据え付ける際の芯棒を埋め込んだ穴ではないかと推測される）と思われる遺構（図版1-3参照）がある。

4. 史的背景

『和名抄』や『延喜式』によれば、当地方は巨麻郡9郷の内「速見郷」に位置する。^⑦『延喜式』（巻四十八、左右馬寮）に見える三御牧のうち柏前牧、穂坂牧は速見郷に位置するとされている。残りの真衣野牧は、速見郷に隣接する「真衣郷」に所在地を求めていている。御牧（

官牧)には827年に牧監が置かれ、成立はそれ以前であった。牧の記事は9世紀後半より多く見られはじめる。『類聚二代格』には870年(貞觀12年)「甲斐・武藏両国に對して貢上御馬雜色人らが公乗を濫用することを禁止」876年(貞觀18年)「甲斐・信濃など4國の牧監等に牧格を検査させる」893年(寛平5年)「甲斐・武藏・信濃・上野等御牧使源悦の解状により、牧監にも欠馬の損害を命ずる」などの記事がみえる。10世紀では駒索の記事が多くみられ12世紀には完全にすたれている。地理的に本遺跡付近は三官牧をほぼ掌握できる位置にある。『中斐國志』によれば、若仲子の対岸大隊・小倉(第1回参照)を屯倉の推定地として記述している。また、『三代実録』には、882年(元慶6年)「巨麻郡の入左近衛將曹壬生直益成男3人女4人を山城國愛宕郡に従属させる」の記事がある。「壬生」とは皇子の養育費をまかなう直隸領のことと、壬生部が当地方にあったことも推定される。以上から当地方が朝廷との結びつきを多くもつことが考えられる。本遺跡で出土した古瓦はこれらを背景にした寺院とか官衙に使用されていた可能性が強い。また、この時期は律令制の根幹である班田制度がくずれる時期(902年に12年に1度の班田の勅行を命じた記述を最後として、あとを絶っていった)にあたる。そこで、今後の発掘によって本遺跡から供給された土器の分布範囲の如何により甚岡などの問題を考えなければならない。

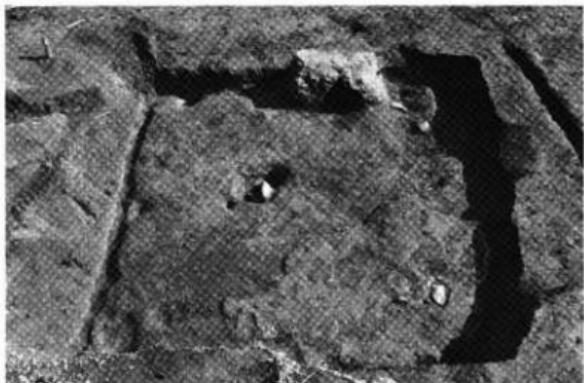
- 註① 宮沢 淳之 1968年「飯田地方の土師器の様相」信濃20-11
伴 信夫 1973年「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」—上伊那郡
箕輪町一
岡田 正彦 1977年「平安時代土師器等の編年試論」信濃29-9
菅沢 浩 1976年「50 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」深訪市
その4
② 坂本 奥夫・末木 健・塙内 真 1983 「シンボジウム 奈良・平安時代の諸問題」
神奈川考古 第14号 坂本・末木の両氏によって他に発表されたものがある
が今回は両氏によってまとめられたこの編年をもとにした。
③ 末木 健 1976 「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡
玉町地内一」
④ 古坂 秀一 1964 「土師器窯跡の諸問題」 立正考古第23号
塙野 博 1977 「土器(土師器)製作遺跡について」 月刊文化財
⑤ 高温時に窯より取り出し、木板などにふせて高温により発生する煙(灰素)を吸収
させる方法
⑥ 松本 富雄 1981 「ロクロビット」 新開遺跡! 埼玉県三芳町教育委員会
⑦ 碓呂 正義 1978 「郡の成立—甲斐国巨摩郡の場合」 郡司及び采女の研究
⑧ 碓呂 正義 1978 「古代官牧制の研究—甲斐の御牧を中心として」 郡司及び
采女の研究
⑨ 山梨郷土研究会編 1981 山梨郷土史年表

おわりに

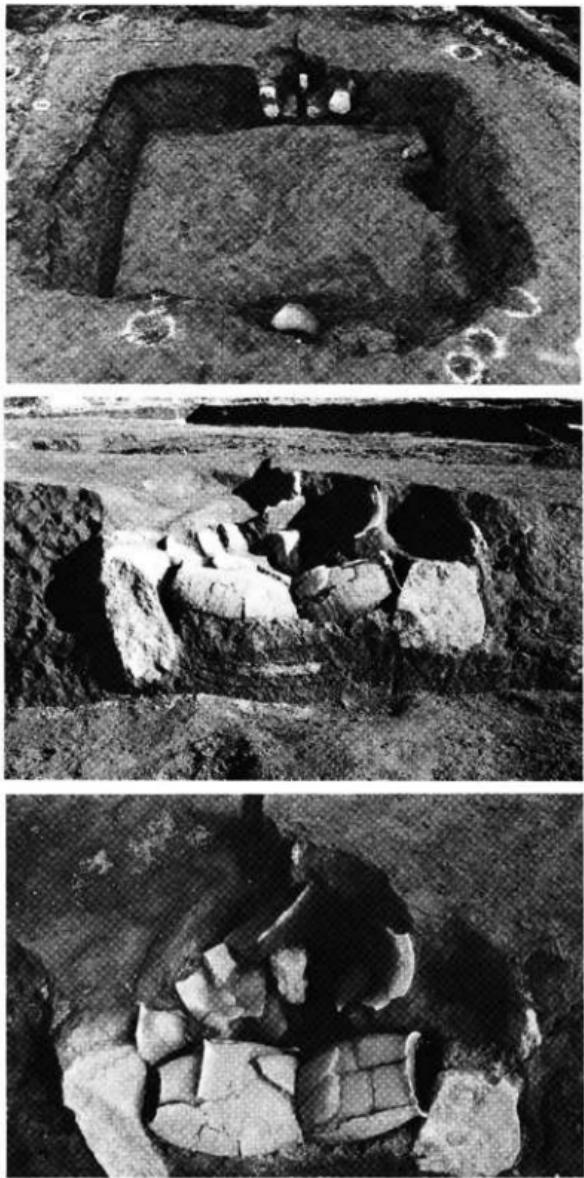
文末ではありますが、本報告書の作成にあたり御協力、御指導をうけた県文化課・埋文センターの各位をはじめ関係諸氏に対し、心より厚く感謝申し上げます。

図 版

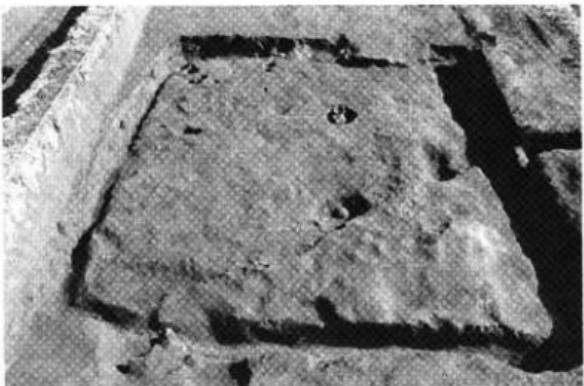
1号住居址



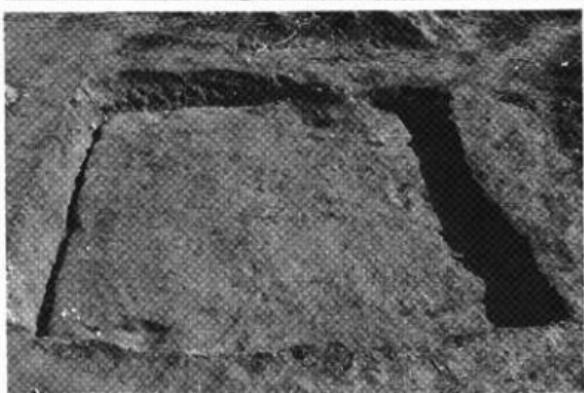
2号住居址



3号住居址



4号住居址



平窯1~3



平窯 4

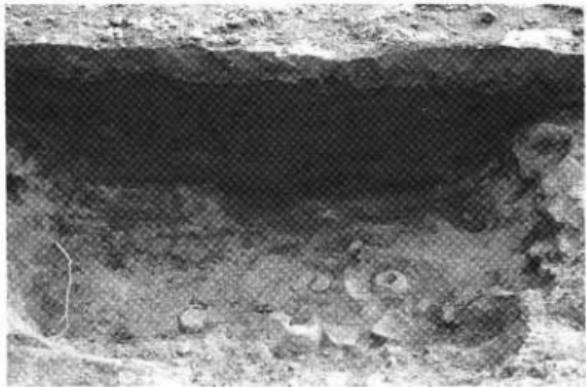


平窯 5

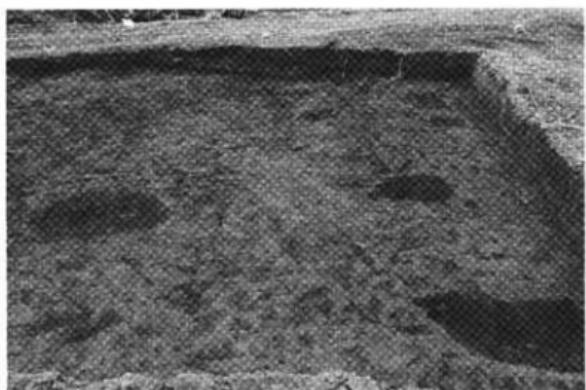


平窯 6

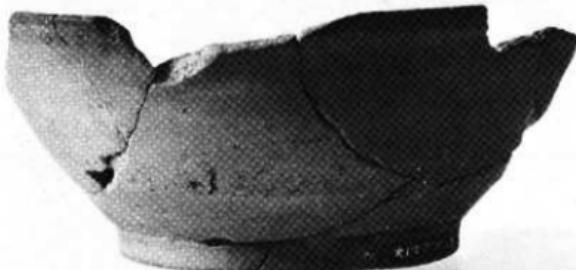
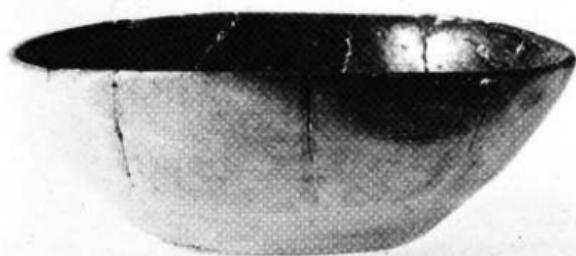




土壤及び
竪穴群



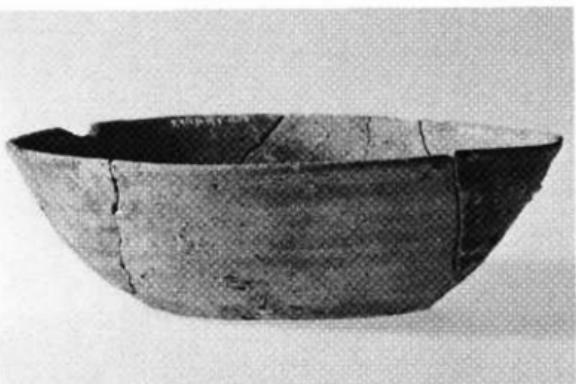
1号住居址



2号住居址



3号住居址



4号住居址



4号住居址



昭和58年3月25日 印刷

昭和58年3月31日 発行

須玉町埋蔵文化財調査報告第1集

大 小 久 保 遺 跡

発行所 须玉町教育委員会

印刷所 島北印刷株式会社

